



GAP ニューズレター第50号目次

ホワイトサンズ事件(1)..... ダニエル・フライ 1  
 生きるための助言(2)..... J・クリシュナムルティ 7  
 指で色を見る..... アルバート・ローゼンフェルド 11  
 <実践記>  
 ぼくの想念観察体験..... 市川英一 21  
 アダムスキーの哲学に接して..... 三田堯一 23  
 UFOが接近した..... 牧野繁雄 25  
 スペース・プログラム..... 久保田八郎 26  
 <改訳>空飛ぶ円盤同乗記(3)..... G.アダムスキー 32  
 「声」..... 39  
 五月の東京月例会、盛況..... 41  
 東洋英和女学院文化祭でUFO資料展示..... 42  
 大阪支部例会報告..... 43  
 <予告>大阪支部大会を開催..... 43  
 月例研究会案内..... 44



GAPとは

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について「知る」機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること。人間はすべて『コスミック・パワー』の御子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた「生命の科学」の研究と理解を通じて体得できるものです。

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立つ幸いです。

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです。

アメリカ、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、デンマーク、イングランド、フィンランド、ドイツ、オランダ、インドネシア、日本、メキシコ、ノルウェー、スウェーデン、スイス(ABC)の順。1971年6月現在)

表紙写真は今年四月三十日に日本GAPの一会員が横須賀方面で撮影した円盤。金星型円盤が二機で飛ぶのがはっきり見えたという。ネガカラーフィルムを使用。

本誌掲載記事はすべて翻訳転載複製禁止。禁無断転載。

# ホワイトサンズ事件 (1)

## ダニエル・フライ



By Daniel W. Fry

A TECHNICIAN TALKS WITH A SPACEMAN  
AND RIDES IN A FLYING SAUCER

世界円盤研究史上で名高いフライの体験は一九五〇年の七月に米国のホワイトサンズ実験場で発生した。今を去る二十二年前のことで物語は少々古いが、これは真実の驚異的円盤同乗事件とみなされて今もなお多くの円盤研究家の研究対象となっている。本誌はフライの体験記である *The White Sands Incident* を全訳により二回に分けて連載することにした。この全訳公開は本邦最初と思われるので読者には貴重な資料になると信ずるものである。編者が別方面から入手した情報によれば、フライが乗った円盤は別な太陽系から来たものであるという。

なお、一九五七年十二月十九日付でフライは次のような書簡を編者宛によこしている。

「一九五七年十二月十九日付のあなたの友好的なお手紙を受け取りました。返事を出すがたいそう遅れて申し訳ありませんが、こちらでは郵便物が山積していますので、どんなに努力してもさばき切れません。

私の著書 *The White Sands Incident* をあなたの刊行物に翻訳転載される件については喜んで許可いたします。私は当地の出版社に相談しましたが、社もこの許可に同意しました。別便であなたの依頼になる私の別著「地球の人々へ」を一冊と、私が出している小冊子数冊をお送りします。興味をもたればそちらで使用されて結構です。

今夜は多数の手紙を書かねばならないので、この書状を簡単に書きましたが、ご活躍のほどをお祈りいたします」

（注）別便で送るといふ著書や小冊子はついに到着しなかった。発送するのを忘れたものと思われる）

— 編者

ダニエル・フライは一九〇八年七月十九日にミネソタ州ヴァードンで

生まれた。ここはミンシッピー川の小さな船着場である。九才の時に両親を失い、以来十七才になるまで母方の祖母のもとで育てられ、一九二〇年に祖母と一緒にカリフォルニアへ来た。

ここでの彼は一般の米国の少年と異なるところはなかったが、ただ知識欲（特に科学的知識）は異常なまでに旺盛であった。

両親は何も財産を残さなかったので、十八才の時には自活しなければならなかった。高校の課程を終えて大学へ進学したかったが、当時の大不況のために容易に職が得られず、通学のかたわら働いて生活することは不可能であった。結局正規の進学の見込みは得られないことを知った彼は、パサデナ公立図書館の教科書・参考書部で夜間の独学を始めて、ここに数年間通い、大学で学ぶのと同じ課程を勉強した。

特に化学と爆薬の応用法に興味を持つようになり、その結果爆発物取扱技師になった。この職業に従事するうちにやがてロケット工学の分野にはいったのである。

一九三四年にパサデナで結婚して幸福な家庭生活を楽しんできたが、悩まされたのは仕事のためにしばしば移動する必要にせまられたことである。一人の息子と二人の娘がある。

フライは本書の刊行までエプロジェット・ジュネラル・コーポレーションで三年間働いていた。これは世界最大のロケットエンジンの開発製造会社である。

一九四九年から五〇年にかけてフライはニューメキシコ州のホワイトサンズ実験場でほとんどをすごした。ここで彼は巨大なモーターのテスト用装置の設置に従事したのである。

## 一九五〇年七月四日、ホワイトサンズ実験場にて

今夜私は空飛ぶ円盤の信者の列に加わった。その一つを見たばかりでなく、それに触れて中へはいり、そして乗ったのである。また私は、自分の感覚器官をまだ信頼し得るとすれば、かなりの時間にわたってその操作者たちと会話を交したのである。

今や円盤は去ってしまい、私は自分の宿舎へ帰ったので、一体ほんとうに起こったのだろうかとか次第に信じがたくなってくるような気がする。ホワイトサンズ実験場にはありとあらゆる科学者が集まっているのに、単なる偶然にせよ計画にせよ一技術者にすぎない私かなぜ選ばれて、ほんものの宇宙船に乗った現代地球の最初の人間になったのだろうか？ こんな出来事は到抵ありそうにもない事なので、自分の正気を疑わずにはいられないほどである。当然のことながら、私が今夜「円盤」に乗ったことを他人に納得させようとすれば、もよりの精神病院のすてきな独房の中に入れられるだろう。だがこれは私の人生中の最大の出来事である。そこでまだ記憶になまなましく残っているあいだにこの出来事を正確に書き記しておきたいと思う。

今日は七月四日なので、私はラスクルーセスの花火大会を見に行つて、自分だけのさやかな祝いをするつもりでいた。（注）七月四日は米国独立記念日）ところがバスの時間を聞き違えたために町行き最後のバスに乗り遅れて、ほとんどだれもない軍の宿舎の中で地団太をふんだあげく、自室ですわって読書する以外に仕方のない羽目におちいったのである。（読んだのはコーク著の熱の移動に関する本である）

夕方の七時半頃に冷房装置のブローアーが止まってしまった。これは数日ごと起こることで、しかも気温が特別高い時にそうなるのだ。

八時三十分までには室内が耐えがたいほど蒸し暑くなったので、外へ出れば涼しかろうと思つて散歩することにきめた。オーガン山脈のふもと付近にある発射台のそばを通過してエルパソまで続いている背後の道路へ出た。この道は南方へ六十マイルほど延びている。しかし発射台の所へ着くまでに私は右折して小さなきたない道へはいり、射撃場を抜けてオーガン山脈のふもとの平原の方へ歩いて行った。

この道をたどりながら射撃場を通り抜けて半マイルほど行った時、初めて物体を見たのである。太陽はすでに沈んで暗くなっていたが、空は星々で輝き、まだ地平線上に現われていない月が夜空にかなりの光を散らせている。山々の峰の上に静止している特に明るい星の一群を見上げた時、そのなかの一個が急に消えてしまった。もちろん私はその場ですぐに目をとめた。星は消えるものではないからだ。(とにかく晴れた夜空では消えることはない)最初私は飛んでいる飛行機がその光をさえぎったのかと思つたが、そう考えても納得がゆかなかつた。飛んでいる飛行機は一点を横切るのに一秒とかからないのに、消えた星は現われないのだ。また、夜の実験場の静寂のなかにいけば、飛行機の場合、肉眼で見える範囲よりも遠方から爆音が聞こえるものだが、音は全然聞こえない。その夜観測気球は打ち上げられないし、打ち上げられたとしても急速に上昇する。だから星をさえぎるにしても数秒間だけだろう。すると右手の別な星が消えてしまい、更に数秒後にはその真下の二個の星が消滅した。この時までには背すじがビリビリするような感じが起こつていた。星々を消してしまつた物が何であるにせよ、それは急速にはつきりとした大きさとなり、しかも空の同じ位置に見えるところから、その物

体がまっすぐに私の方へやってくることは疑いながつた。

やがて私にはそれが見えてきて、同時にもっと早く見えなかつた理由がわかつた。その物体の色は夜空の暗黒と同じようにどす黒いために、すぐ近くまで来ても輪郭以外に識別することが困難だつたのだ。それはなおもこちらへやってくる。逃げ出そうという気が強く起こつたが、爆発やロケット関係の仕事に豊富な経験を持つ私は、進路を確かめるまでは接近するミサイルから逃げ出すのは愚かなことを知つていた。逃げ出せることもある一方、飛び込むこともあるからだ。それに逃げながらその進路を判断することなどできるものではない。

物体は真近にせまって来たので、その長軸の径が約三十フィートの卵形の球体であることがわかつた。時速十五ないし二十マイルほどで進行して来る。地上に着く頃は速度がゼロになると思われるような割合で減速しているらしい。また、進路を変えない限り少なくとも私から五十フィートはそれれることもわかつた。そのスピードの遅いことにやや安心した私は元の位置にとどまつて、物体がそよ風に乘つてただようアザミの冠毛みたいに軽く滑空して来て、全然バウンドしないで七十フィート彼方に着陸するのを見つめていた。物体の下敷になつたヤブがメリメリと音を立てた以外、物体は無音のままである。二、三十秒間、私は子供が初めてサーカスの演技を見るようにそれを見つめていた。

私は多年ロケットやミサイル開発の分野で働いてきたし、ホワイトソックスでの仕事や諸関係などによつて、航空機分野の開発のほとんどの精通していると思つてゐる。しかし今眼前にはかつて聞いたことのないほどに進歩した飛行体があるので、初めてキリンを見て「よく見たけれど信じられない」と言つた山奥の農夫のような気持になつていた。「もしソ連がこんな飛行物体を持っているのなら、神よアメリカを助けたま

え！」というのが私の最初の意識的な考えであったが、そのうちどうやらこれはソ連やその他の如何なる国から来た物体ではないということに気づいてきた。だれがこの物を作ったにせよ、その人は地球の最高の物理学者がやっと夢想し始めたばかりの多くの問題を解決しているからである。

この物体の作動には音を伴わない。プロペラの音もないし、推力を生じさせるためにノズルから噴射される白熱ガスの閃光も轟音もない。天空の彼方から静かにやって来て地上に音もなく着陸したのだ。たぶんそれが解答なのだろう。物体は私が最初に見た時からずっと降下を続けていた。ただ滑空していただけなのだろう。しかし着陸する前にそれは時速数マイルに減速し、落下の形跡を示さなかった。これはヘリコプターまたは、空気より軽い物”しかやれないが、この物体にはプロペラの羽根は全然ないし、地上に落ち着いた時にその下でヤブがペしゃんこになつた事實は、物体が”空気より軽い物”でなかったことを決定的に示している。これが何であるにせよ、他にどんなことがやれるにせよ、物体はニートンの最もよく知られた法則に対してたしかに”いたずら”をしたのである。

以上の事柄が心中に浮かんでいたあいだに、ふと自分が無意識に物体の方へ接近していたことに気づいた。私は英雄ではないし、今までもただの人間だ。ただの。ま、たく本能的に私は自分とこの未知の物体間の距離をできるだけ大きく保つたぞと叫んでいた。ところが工合のわるいことに私はいつもひどい好奇心にたたられてきた人間であったし、好奇心の対象が科学的な性質のもので、特に科学上重要な発達をとげた物であるときは、その好奇心が気遣いじみてきてあらゆる理性を吹き飛ばしてしまふのである。

私は物体から二、三フィート以内に接近して、ゆっくりと周囲を歩き始めた。それは空中に見られたとおりの球体で、頂上と底部がかなり平たくて、高さ約四メートル八十センチ、横の長さが約九メートル、周囲のフチの高さが地上約二メートル十センチある。垂直軸から四十五度以内の角度で下から見ると灰皿の形のようにわん曲しているが、実際はソース皿の上にスープ皿をさかさに重ねたような形である。最初空中に見えた時に現われていた濃紺色はもう消滅していた。ただの磨かれた銀色の金属らしい表面を呈していて、ごくかすかな紫の玉虫色を帯びているように思われる。物体の周囲を一周したが、入口や継目などは見当らない。内部に人がいるとすれば頂上か底部から出入りするにちがいないと思つた。

状況を調べるために私は立ち止まった。これからどうすればよいか。基地へ帰って物体の出現を報告するか。最初そうするのが筋道になつているように思われたが、別な考えが起つてきた。基地へ帰って上司を見つけて他の人たちと引き返すには少なくとも四十五分はかかるだろう。そのうちに物体が逃げてしまつたらどうすればよいか。ペしゃんこになつた草むらが証拠として残るだけだ。そんなことでだれが信じてくれるだろう。だれかが信じてくれたとしても、認めてくれる人はいないだろう。空中を飛ぶ不可解な物体の目撃をうっかり洩らしたばかりに嘲笑をあげせられた例を私は読んでよく知っている。物体が着陸するのを見て手で触れるほどに接近したのに、ペしゃんこになつた草むら以外に証拠がないということになれば、目撃者の運命はいわずと知れたことである。こう考えてふと気がついた。数分間物体に触れるほどに接近していながら、実はまだ手でさわっていなかったのだ。たぶん触感によって物体が作られた材料のことで何かがわかるかもしれない。とにかくその

温度はわかるはずだ。私は進み出てなめらかな金属に指の先をこわごわとあててみた。気温よりも数度高めだが、信じられないほどになめらかである。そのなめらかさを言葉であらわすのはむづかしい。薄い石ケン水で濡れた大きな真珠の表面に指をすべらせれば、私とその金属にさわった時に感じたのとやや似たような感じがするかもしれない。てのひらで金属をたたいてみると、指先やてのひらの下部に、かすかながらもたしかにくすぐったい感じがする。

するとかたわらの空中からきびきびした声の流れってきた。

「船体にさわらない方がいいよ。まだ熱いから！」

この声が突然あたりの静けさを破るまで自分が緊張しきっていたことに気づかなかった私は、数フィート飛びのいて、低い草むらの中に飛び込み、砂の中に全身を伸ばして腹ばいになった。くすぐすと笑うような声を聞いたが、その声は少しおだやかな調子でまたも流れってきた。「落ち着きなさい。君は友達なのだ」

私の不格好な姿勢の恥ずかしさと、その声のおだやかな調子と親しみのある言葉などで、それまでの恐怖心はすっかりなくなつて、少々腹が立ってきた。起き上がって服を手ではたき、頭髪の中にはいり込んでいた草を力まかせに引き抜いた。

「もっと小さな声で言ってくれてもよきそうなものだ。そんな調子でおれを吹き飛ばす必要はないじゃないか。腰を抜かしたぜ」と私は不平を言った。

「吹き飛ばす？」と声のためらうように言って「ああそうか、君は警告の声が大きすぎたと言うんだな。すまん、仲良しクン。だが君はあやうく死ぬところだったんだよ。ゆっくりコントロールしているひまがなかったんだ」

「船体がひどく放射能を帯びているというのかね？ そうだとすれば、ぼくはまだかなり近寄りすぎていることになるよ」と尋ねた。

「放射能を帯びてはいない。私が「熱い」という言葉を用いたのは、君たちの言葉で状態を説明するのにこれ以上うまい言葉が見当たらないからだ。船体はあらゆる物質に反発するフィールドを帯びている。このフィールドは分子間の距離では非常に強力だがその距離の七乗に逆比例して弱くなるから、船体表面から数ミクロンのところでは問題とはならない。君は表面がひどくなめらかですべすべしているのに気づいただろう。これは君のてのひらが実際には金属に触れていないで、フィールドの反発力によって表面からほんのわずか離れていたためだ。われわれは船体が着陸時にきずつけられないようにこの保護フィールドを用いている。また、これは大気圏内を高速で飛ぶ必要がある時に、空気の摩擦を極端に減らすことにもなるんだ」と声が答える。

「しかしどうやってこれがぼくを殺すことになるんだ。ぼくは船体に触れて、てのひらが少しびりびりするのを感じただけだが、ぼくの言葉についてしゃれたことを答えたのはどういう意味なんだい？ 君がヤンキーでなかったらぼくは耳をかたむけなかったところだ」

「君の最初の質問だが」と声は落ち着いて答えて「すぐに君を殺すという意味ではないんだ。実際は数ヵ月かかるだろう。だがそれは「すぐに」というのと同じぐらいに確かなことなんだ。最もうまく説明すると、このフォースフィールドに人間の皮膚をさらすと、血液中にいわゆる「抗毒素」が生じる。われわれにもまだよくわからない理由によって、この抗毒素が肝臓に吸収されて、そのために肝臓がすぐく肥大し充血する。皮膚が一分間かそれ以上もフィールドにさらされた場合は確実に死ぬる。君の場合は大変な危険になるほどにはさらされなかったと思う。ただし

君はいずれ何かの影響を確実に感じるだろう。もちろん君のからだの生理的機能がわれわれのからだと同じだと考えてのことだ。われわれのからだも君のからだも同じだと信ずべき理由がいろいろあるんだがね。

君の二番目の質問については、私はいわゆる「ヤンキー」ではない。もっとも私の現在の割当仕事によってヤンキーになる必要はあるんだがね。君が私をアメリカ人の一人だとみたことは、英語をおぼえるために過去二年間費してきた努力の甲斐があったしるしだ。実際のところ私はまだ君の惑星に足を着けていないんだ。地球の大気や重力に順応して生活に慣れるには少なくとも四年はかかるだろう」

長時間のような気がしたが、おそらく数秒間だろう、この言葉の完全な意味を理解しようとして私はだまって立っていた。ついにゆっくりと発言した。「ぼくが自分の目でこの物体がやって来て着陸するのを見なかったとしたら、君は沢山の空想科学小説を読んだベカだとぼくは言ったかもしれないぜ。だが実際は見たんだから、ほとんどすべての可能性を認めようとしているんだ。おまけに、ぼくがここにいたことと君の着陸を見たことは全くの偶然なんだから、ぼくが信じようと信じまいと君には何の関係もないことは明らかだ」

「とんでもない」と声が答えた。「君がここでいろいろな事実をよく知って、その結果自分自身の意見を持つ機会を与えられたことは、われわれにとって重要なことなんだ。ここへ来た主な目的の一つは、地球人の順応性、特に彼らの習慣的な考え方にとって全く未知な概念に心を急速に順応させる能力の程度を知ることにある。むかしわれわれの祖先が行なった地球探険はこの点で完全な失敗に終わった。今度はどうやら受容的な人を発見できそうだから、われわれが地球人の進歩に何かの役に立てそうだ。君の場合は、少なくとも今までのところは君の振舞がわれわ

れの最上の予想を上回ったんだ」

私は言った。「君たちの人種と——どんな人種であるにしても——われわれ地球人は少なくとも共通点の一つ持っていることがわかるよ。つまり「冷やかし」がユーモアの基本的な形だということだ。しかしその程度で悩まされはしないよ。ぼくは「冷やかし」の大家たちからかわれてきたんだからな。

君が最初目についてからぼくがやったことはすべて間違っていたことを認めるよ。第一に、ぼくに分別があるならば、じっと待って物体の下でべしゃんにされるかわりに、君が来るのを見たときにいち早くここから逃げ出したところだ。だが君が着陸した時には逃げたり少なくとも安全な距離でじっと立っているかわりに物体のまわりをうろつく必要があった。そして君の警告の音がスピーカーか何か知らないが、そこから流れ出した時、ぼくは恐れたウサギみたいに飛びのいて、自分でもはっきりわかるほどぶざまな格好で砂の中に這いつくばったんだ。そして、最後に言うが、重要さは劣らないよ。ぼくが君の言葉を信じていると君は思っているらしい。前にも言ったようにぼくは君の言葉が真実味を含んでいると考える余裕はあるんだが、大ホラらしいと考える余裕もあるんだ」

「まさにそのとおりだ」と声が答えて「私の立場を説明させてくれ。冷やかしなどは言うつもりはなかったよ。心から本気で言ったんだ。最初に君は、逃げて安全を求めるよりも未知の危険に身をゆだねながら、好奇心にかられて物体を調べたと言った。これは知識に対する欲求と現状の安全に対する欲求とのあいだの悩みをあらわしている。(以下次号)



# 生きるための助言

## (2)

ジッドゥー・クリシュナムルティ

### 孤独と分離

太陽は沈んでしまい、木々は暗くなって暮れゆく空を背景に黒い影をなしていた。幅の広い大きな川はおだやかで静かである。月がちょうど地平線に見えた。二本の大きな木のあいだから昇っているが、まだ物体に影をつけてはいない。

われわれは川のけわしい土手を歩いて行き、緑色の小麦畑の端にある小道を通った。これは非常に古くからある道で、無数の人が踏みならして伝説と静寂に満ちている。それは畑やマンゴー、タマリンドの木や荒れ果てた聖堂などのあいだを続いている。大きな庭園があり、スイートピーが芳香を放つ。小鳥たちは夜にそなえて落ち着き、大きな池が星々を映し始めた。その夕方、自然は打ちとけてはいなかった。木々は人間から離れて冷たく、自身の沈黙と暗黒の中に引込んでしまった。数名の村人がしゃべりながら自転車でそばを通り抜ける。するとまた深い静寂と平安がやってくる。万物が孤独になる時にくるあの静寂と平安である。この孤独は心が痛むような恐ろしい孤独ではない。それは存在の孤独であり、傷つかない富かな完全な孤独である。あのタマリンドの木が実在するのはそれ自身が存在するからである。この場合の孤独も存在からくる孤独である。人は火のように花のように孤独であるけれども、その純粹さ、その無限に気づかない。人は孤独があるときにのみほんとうに意志を通じることができるのである。孤独であることは否定や自閉の結果ではない。孤独はあらゆる動機、あらゆる欲望の追求、あらゆる目的の浄化である。孤独は心の最後の結果ではない。人は孤独を望むこと

はできない。このような望みは他との交わりができない苦痛からの逃避にすぎない。

恐怖と心の痛みを伴う孤独は分離であって、これは自我の必然的な行為である。この分離の過程は混乱、争い、悲しみの産物である。分離は真の孤独を生み出すことはできない。孤独が存在するためには分離をやめねばならない。孤独は分離できないものであるが、寂しさは分離そのものである。

## 師と弟子

彼は語り始めた。「私は或る大師の弟子だと言われてきました。そうだとお考えですか？ これについてあなたがどのように考えておられるか知りたいのです。私はあなたもご存知の或る教団に属しています。それで、その教団内の先生方の代理となつて外部の責任者たちが、教団に対する私の活動ぶりによって弟子になつたのだと言っています。私は今生において第一級の弟子になる機会をもつているとも言われています。彼はきわめてまじめに考えており、私たちはかなり長く話し合つた。如何なる形にしても報酬というものは人をひどく喜ばせるものであり、人がこの世の名譽に多少とも無関心な場合は特にそうである。あるいは人がこの世であまり成功しない場合は何かの教団にはいつてひどく満足する。精神的に高度な発達をとげたときみなされている人によって選ばれたときは特にそうである。なぜならその場合本人は大いなる理想のために活動しているグループの一部分となるからである。当然のことながら

本人はその忠誠ぶりや大義名分のために払つた犠牲に対して報われるにちがいない。もし具体的な報酬がなければ本人の精神的な進歩が認められるのである。これはうまくいっている教団にありがちなことだが、本人の実力によって他のメンバーをより以上に活動させるために認めるのである。

成功があがめられる世界ではこの種の自己進歩が理解され奨励される。しかし人が或る大師の弟子であると他人から言われたり、そう考えたりすることは、明らかに多くの醜悪な利用につながるものである。そうすると工合のわるいことには、利用者も利用される者も相互の関係が深まつたと感じる。そしてこの自己満足の拡張が精神的な進歩とみなされ、更に本人が師と弟子のあいだに仲介者を持つたり、師が別な国において近寄れなかつたり、直接に会えなかつたりする場合は、その自己満足が特に醜悪に下劣になる。このように近寄れない状態や直接に会えない事情は自己欺まんや壮大ながらも子供っぽい幻想へのドアを開くことになり、この幻想が狡猾な者や栄光や権力を求める者たちに利用されるのである。報酬や処罰は謙虚さがない場合にのみ存在する。謙虚さは精神的な実践や否定の最後の結果ではない。謙虚さは達成されるべきものではなく、つちかわれる徳でもない。つちかわれる徳は徳であることをやめてしまふ。なぜならその場合、それは別な形の達成物であり行なわれるべき記録にすぎないからである。つちかわれる徳は自我の放棄ではなくて自我の否定的な主張である。

謙虚さは優秀者や劣る者、師や弟子といった分割を知らない。師と弟子、真実と自分自身などのあいだに分割がある限り、理解は不可能である。真理の理解においては師も弟子もなければ進歩した者や劣る者もない。真理とは過去の重荷や残りカスを伴わずに刻々に「存在するもの」

を理解することである。

報酬や処罰は自我を強めるだけで、それは謙虚さを受けつけない。謙虚さは「今」存在するのであって、未来に存在するのではない。人は謙虚に「なる」ことはできないのである。或る状態に「なる」こと自体は自尊の継続であり、それは徳の実践の中にそれ自体を隠すことである。或る状態になろうとしたり成功しようとして、われわれの意志はなんと強力であることか！ 成功と謙虚さが一体どうして調和するだろう。しかるにそれこそ「精神的」な利用者と利用される者とが追求しているものなのであり、その中に闘争と悲惨が存在するのである。

「師というものは存在しないとおっしゃるのですか？ 私か弟子であることは幻想で見せかけだというのですか？」と彼は尋ねた。

師というものが存在するかしないかは取るに足りないことである。それは利用者や秘教団などには重要だが、真理を求める者にとっては全く見当違いなことなのである。金持もクローリーも師や弟子と同じほど重要な存在である。師の存在の有無、秘伝を授けられた者と弟子の区別などは重要ではなく、重要なのは自分自身を理解することである。自分を知らなければ自分の考えに基礎はない。まず自分を知ることなくして、どうして真実なものを知ることができるだろう。自分を知らなければ必ず幻想が起こってくる。「君はこれこれの人間だ」と他人から言われたりそれを認めたりするのは子供っぽいことである。今世または来世において報いをもたらしてやると約束する人間に気をつけることが大切である。

## 金持と貧乏人

暑くて湿っぽい日で、大都市の騒音があたりに満ちていた。海から来るそよ風は暖かく、タールや石油のおいもただよっている。遠い海に赤い太陽が沈んでもまだひどく暑い。室内に満ちていた多くの聴衆はすぐに出て行き、われわれも街路へ出た。明るい緑色の閃光にも似たオームたちがねぐらへ帰って行く。朝早くそれらは果樹園や緑の野原や広々とした田園地帯のある北方へ飛び去った。夕方になると帰って来て、その都市の木々の中で夜をすごすのである。その飛び方は決してなめらかではなく、いつも落ち着かず、騒がしくて、はなやかである。オームは他の鳥のようにまっすぐに飛ばず、絶えず左右に方向を変えたり、急に木の中へ飛び込んだりする。飛ぶ時には全く落ち着かない鳥だが、赤いクチバシと輝かしい黄金色がかつた緑色はなんと美しいさだろう。鈍重で醜いハゲタカが輪を描いて、シエロの木で夜をすごすために降りて来た。

一人の男が笛を吹きながらやって来た。その男は一種の下男である。彼はずっと吹き鳴らしながら丘を登って行く。われわれもそのあとをついて行く。男は横道へはいつて行くが吹きやめない。騒がしい町の中で笛の音を聴くのは奇妙なことで、心の底までしみ通るような音色である。たいそう美しいので、われわれは遠くまであとをついて行った。教本の街路を通って明るい大きな通りへ出た。更に先へ行くと一団の人々が道路わきでひざを組んですわっており、笛吹きはその仲間に加わった。われわれも仲間にはいり、みんなはまわりにすわった。まだ吹いている。彼らは大体に運転手、下男、夜警人たちで、数名の子供と一、二匹の犬もいる。自動車が通過する。その一台はおかえ運転手が運転し、その中には美しく着飾った婦人が一人で明るい車内にすわっている。別な車

が一台やって来て、運転手が出て来てわれわれと一緒にすわった。みんなは愉快にしゃべり、身振りよろしく笑いさざめいているが、笛の音はやまない。そこには喜びが満ちあふれている。

まもなくわれわれはそこを離れて、金持ちのきらびやかな家々のそばを通過して海の方へ出る道路を歩いた。金持ちはそれ自体の独特な雰囲気を持っていて、どんなに教養があり、ひかえ目で、家柄が古く、洗練されていても、金持ちは近寄りたくない敵然たる冷淡さを持つが、それはおかしがたい確実さと堅固さでもある。彼らは富の所有者ではなく、富に所有されている者であり、それは死よりも悪いものである。彼らのうぬぼれは慈善行為となる。彼らは自分の富の保管者であると考えている。彼らは慈善院を持ち、募金をする。彼らは作り手であり、設立者であり、与え手である。教会、寺院などを建立するが、彼らの神は金の神である。ひどい貧困にある人や精神的に低劣な人はきわめて鈍感であろうが、そのなかには質問や議論に來たり真実を発見しようとして來たりする者もある。貧乏人と同様に金持ちにとっても真実を発見するのは極端に困難である。貧乏人は豊かに強くなりたがっている。そして金持ちはすでに自分の行為の綱の中に捕えられている。しかも彼らはそれを信じてあまり冒険をやらない。彼らの信仰や儀式、希望や恐怖は真実とは関係ない。彼らの心がからっぽであるからだ。外界が大きく見えれば見えるほど内界が貧困になるのである。

富や快楽や地位の世界を断念するのは比較的容易なことである。しかし或る状態になろうという欲望を捨てることは、非常な英知と理解を必要とする。富が与えてくれる力は真実の理解の邪魔になる。才能の力でも同様である。この特殊な自信の形は明らかに自我の働きである。そして困難だけれどもこの種の自信と力を捨てることは可能なのである。し

かしもと微妙で、しかも表面から隠されているのは、或る状態になろうとする欲望の中にひそむ力と衝動である。富または徳によるにせよ、如何なる形の自己拡張といえどもそれは闘争の過程であり、苦痛と混乱を生み出すのである。或る状態になろうとして気負い立った人は、決して心を落ち着けることはできない。心の落ち着きは実践または時間の経過によるものではないからだ。心の落ち着きは理解の状態であり、或る状態になろうとすることはこの理解を妨げる。或る状態になることは時間感覚を生み出し、それが実際には理解を遅らせるのである。「私は或る状態になろう」というのは尊大から生じた幻想である。

海も町と同様に騒がしかったが、それには深味があり、実質を有していた。夕暮れの星が水平線に出ている。われわれはバスや自動車や人間たちで混雑している街路を通過して引き返した。一人の男が道路はたでハダカになって眠っている。彼は乞食で、疲れ果てて、ひどい栄養不良である。彼を目覚めさせるのはむづかしい。そのむこうには公園の緑の芝生と美しい花があった。

(20ページより)  
つてしまえば学説を立てることが有意義となるだろう。

われわれが知る限りでは、DOPは今まで気づかれなかった、そしてそのために怪しまれなかった全く新しい種類のエネルギーまたは放射線であるのかもしれない。この考え方は不合理ではない。結局この分野における発見の歴史は、われわれがまず何かを感じて、次に周囲をとりまくエネルギーの海に乗り出し、DOPの感覚を起こさせるものを探し出すことにある。この特殊な感覚をわれわれはまだ体験していないために、探す目的物が存在することに気づかなかつたのだ。今、探し始めたからには何が見つかるかわかつたものではない」

# 指で色を見る



ジョージ・アダムスキー著「生命の科学」(文久書林版)百十三ページに「色による実験法」という小見出しのもとに「ライフ誌一九六四年六月十二日号に科学者の発見した色周波数に關する記事がある」と述べてある。この英文記事はすでに早くから日本GAPメンバー三田堯一氏のご協力により編者の手元に届いていたが、翻訳転載権の問題で容易に発表できなかったところ、今回ライフ誌のご好意により転載権が与えられ、五十号特大号に全訳を公開することができた。本邦初公開のこのすばらしい記事が読者に役立てば幸いである。ライフ誌と三田氏に深甚の謝意を表する次第である。なお多数の写真は省略した。

## アルバート・ローゼンフェルド

モスクワの或る診療所で、ソ連でも高名な才能を持つ小柄な若い婦人のローザ・クレシコワは、ライフ誌の通信員ボブ・ブリガムの片手を取って彼女の両眼を注意深くしっかりと覆わせ、何も見えないようにした。それから自分の片手をブリガムの手に重ねてしっかりと押しつけた。「この方がいいでしょう。何かの光がはいってくれば心が散りますから」と彼女は言う。

はでな色の表紙のついた二冊の雑誌がローザの前のテーブル上に置かれた。両目をしっかりとふさがれたまま彼女はまず片方の手の指先で一冊の雑誌を静かになで、次にもう一冊の雑誌をなでる。「これは黄色です」と彼女は自信に満ちた声で言い、「こちらの方は青色です」と言う。ブリガムが驚いたことに彼女の言うことは的中したのである。「最初の雑誌からは温かさを感じますが、二冊目は冷たい感じですよ」と説明する。二冊の雑誌は取りかえられたが、またもローザは目で見ないで色を言いあてるという驚くべき離れ業を演じた。今度は全然雑誌に触れないで六インチ上方の空間で手を横へ動かしただけである。

驚きながらもまだ疑っているブリガムは自分の名刺を取り出した。これはローザがまだ見たことのないものだ。ローザははいねいに——依然としてその名刺が見えない状態のまま——その文字を正確に読んでいった。しかも指先ではなく臂で読んだのである。たとい細目をあけたにしても名刺は見えなかったはずだ。前腕で名刺を完全に覆っていたからだとブリガムが言う。

更に数回の実験を行なった後、ローザはブリガムにむかってあなたの指先で色を言いあてる実験をやってごらんなさいとすすめる。ブリガムがまるで的はずれなことをやると、ローザはなぐさめて言った。「時間をかけるとよいのです。もっと練習する必要があります。真剣にやれば

だれでもうまくゆくのです」

皮膚で物を見るというローザの能力は一種の見世物的なトリックのように思われるかもしれないが、ソ連のトップクラスの科学者のなかには——最初は疑っていたのだが——今は「皮膚視覚による知覚（略称DOP）」は実在すると確信している者がある。それは直感力といわれる第六感を超える第七感と呼ばれている。このDOPのナゾを満足のゆくように説明した人はいないが、この現象を研究した報告類は世界の科学界に議論をまき起こした。ソ連の科学者間ではあざけるような不信から完全な熱狂的承認に至るまでさまざまに意見が分かれた。信頼できる支持者のなかには二人の科学者がおり、彼らは二百回の実験を試みた後に、ローザが言っているようにDOPは訓練によって開発できると信じているのである。

彼らの確信は米国の有名な心理学者に認められるところとなった。それは前コロンビア大学教授で現在はニューヨークのクイーンズ大学の三十名から成る心理学科の科長グレゴリー・ラズラン博士である。ソ連で生まれたラズランはソ連の心理学に関する権威者で、過去七年間連邦政府の国民保健協会のためにこの分野でソ連の研究にひけをとらなかつた人である。彼も最初は信じなかつた。昨年レニングラードの会議で初めてDOPのことを聞いたとき、彼は他の人と同様に疑っていた。DOP研究の先駆者の一人であるアブラム・S・ノボメイスキーがその会議でこの問題を持ち出した時、「このような奇妙な研究に対する私の持ち前の偏見によって、そんな話を耳をかたむけようという気持ちさえ起こらなかつた」とラズランは告白している。

「これは人があたまから信じないような事柄だが、もう私の心中にはいささかの疑惑もない。この問題ほどに人間の知覚力に対する新しいドア

の開けることを考えさせた問題は今までになかつた。私は夜ほとんど眠れない。そして自分で実験を始めるのが待ちきれないほどだ。この問題が広まって一つの大きな科学的進歩が達成されてきたことを人々が認め始める時こそ、われわれはこの分野の研究の大成を見ることがなる。その結果は革命的なものになろうとしている。肉眼を用いなくて物を見る！これが盲人にとって何を意味するかを考えていただきたい！」とラズランは語る。

今までラズランのDOPに関する研究について聞いた米国の科学者のなかには、ラズランの楽観的な考えを非批判的で早計だとみる向きもある。ソ連の科学水準をみくびることなしに、彼らはローザの場合をも含めてソ連のこの問題に関する研究の多くは、米国なら要求されるかもしれない或る程度の証明が不足していると考えている。

DOPに関する米国の最初の関心は、米科学者でニューヨークのバーナード大学の心理学教授リチャード・P・ユーツ博士が或るアメリカ人の能力者に関する最初の実験を報告した昨年（一九六三年）秋に始まつた。その報告はミシガン州フリントの四十二才になる主婦パトリシア・スタンリー夫人の驚くべき能力について述べている。彼女は指先で色を見分けることができるというのだ。パトリシアは約六十時間テストされ、ユーツ博士はこのテスト状況は如何なるインテリの可能性もないほどに正確なものであったと確信した。しかしスタンリー夫人とそれに関連して科学者や大衆間に起こったDOP問題全体についての大きな関心は、後の一連のテストで夫人が能力を失ったと思われる時になって下火になってしまった。

今ラズランは、新たにベールをぬいだソ連のデータが新しいDOPの

リバイバルをもたらさずだろうと予告している。ラズランの熱心な学問的探求のおかげで、われわれは初めて、しかも詳細に、DOPに関するソ連の研究のすばらしい話をお伝えすることができるのである。

肉眼を全く問題にしないこの視覚像は、生きた有機体が周囲の世界を知覚する様子に関する既成概念のすべてと全く無関係のようである。

「しかしDOPの存在はさほど大きなショックとはならない。実際、DOPには不合理なものは何もないからだ」とラズランは信じている。

人間は因襲的に五感以上のものを持っていることを科学者は知っている。特に触感は一つ以上の感覚を含んでいる。たとえば寒暖を区別するのに用いられる感覚は、固さや柔らかさを区別するのに用いられる感覚とは異なるのである。「多くの低次な有機体はそのボディ全体に光の感覚体を持つことをわれわれは知っている」とラズランは指摘する。「たとい人間が自分で気づかない、光を見る或る種のメカニズムを皮膚の中を持っていたとしても——これは進化の初期の段階のこん跡として残された視覚メカニズムかもしれない——驚くにはあたらなない」

### 能力者は沢山いる

人間においてもDOPは歴史上未聞の現象ではない。この能力を持つ人については十九世紀に多数の事件が報告されている。一例をあげると指、額、胸の上方などで物を見ることができた男がいた。別な能力者は自分の腹の上に置かれたカードを言ひあてることができたといわれている。

ラズラン自身は一八九八年にベテルスブルグで発行された七十九頁から成るロシア語の文献を発見した。その中に述べてある一婦人の超能力

は、ローザ・クレシヨワや一九六三年と六四年にテストされた他のロシア人能力者の能力といちじるしく似ているようである。加うるにこの婦人は額でもって食物の味を知ることができたらしい。「一年前だったらこんな事はすべて私にはナンセンスだと思われたかもしれない。しかしソ連でDOPに関して発見されている物事を考えると、それらを調査するチャンスが来るまでは、こうした能力者の主張をナンセンスとして捨てるのは誤りであると思う」とラズランは言う。

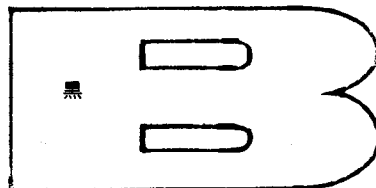
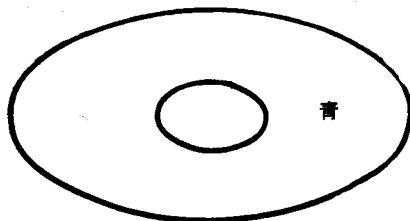
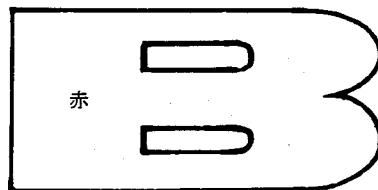
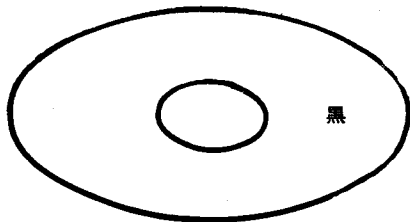
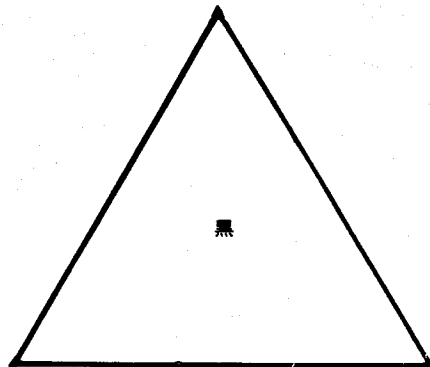
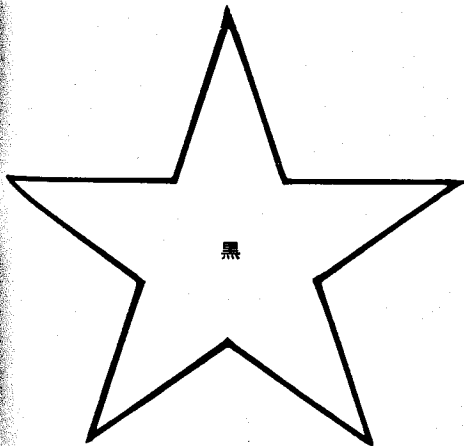
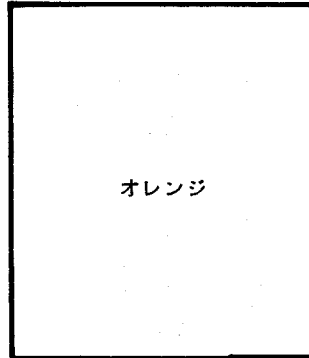
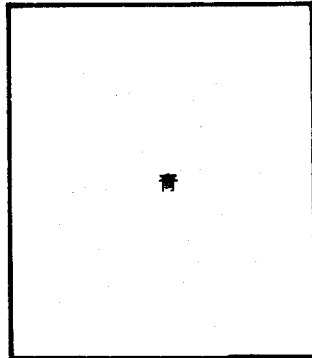
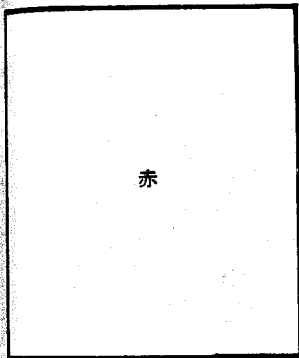
これらの初期の報告類は通常DOPの単独ケースを述べているだけである。透視力のように、ときたま観察される記録の困難な他の現象と同様に、DOPを科学的に扱う方法はないらしい。したがってDOPは時折の好奇心をそその程度にとどまっている。一九六二年にソ連で脚光をあびるようになったローザのケースがこのような好奇心をとどめるにすぎなかったとすれば彼女は大きな騒ぎをひき起こしはしなかったことだろう。科学的な大発見になるかもしれないとラズランが信ずるようなものにDOPが突然なってきたのは、ローザの発見後に起こったのである。

### ローザ・クレシヨワの超能力

一九六二年の春、当時二十一才のローザ・クレシヨワは、ウラル山脈中のニジニー・タギールという産業都市に住んでいた。十四才の時に脳をわずらった結果ローザはテンカンになったが、それ以外は普通の子供と異ならないように見えた。彼女の家系には盲目の血統があったので、彼女は多年盲人を助けることに関心があった。十六才の時からずっと盲人用の点字に精通していた。本人の説明によると、自身の内部に一種の能力があるのを発見したのは、触感を応用する新しい方法を試している

### 練習用図形

ここに掲げた図形は読者が自分でDOPの能力を開発できるように特にラズラン博士がデザインしたものである。まずしっかりと目隠しをし、まず赤を片手の指先(複数)で一分間ほど図形を軽くなでて色から来る感じを心に印象づける。次に青で同じ練習をする。これを交互に行なって両方の色から受ける感じの相違がわかるようになったら、左右いずれかわからないように並べて目隠しをしたまま指先の感覚だけの中させる練習をする。ソ連の実験者によると能力のある人でも二種類の色を見分けるには一回につき三十分ずつ数回の試みが必要とするという。赤と青の見分けがうまくゆくようになったら、他の色で試みて、形と色とを見分ける練習をする。各図形は色紙(いろがみ)を切り抜いて作るとよい。





際中であつたという。特にその能力は右手の中指と薬指にあつて、これが形や文字を感知するのである。点字の浮彫りのような表面から盛り上がっている文字や形ではなく、普通の書物の頁に完全に「平らに」印刷された形や文字を感知するのだ。最初に心に浮かんだことは「学校の試験中にポケットにノートを入れておいて、それを指先で読むことができたらすてきだわ」であつた。そしてなおも試しているうちに目を閉じていても色を見分けることができるのを発見したのである。

当然のことながらローザの能力に関するうわさが広がつて、彼女のテスト生活が始まつた。管理された研究室の中でローザの最初のテストを行なつたのは、イサク・M・ゴールドベルクという神経病理学の専門家であり医師である。氏は非常な感銘を受けたので、ニジニー・タギールの教育大学のノボメイスキー教授の心理学研究室でもっと厳密なテストをするためにそこへ彼女をつれて行つた。するとノボメイスキーも等しく感銘を受けた。その年の九月にゴールドベルクはローザを全ソ心理学会のある地方大会につれて行つてその能力の実験をやつてみせた。これを見て非常に驚いた科学者たちは容易に信ずることができず、一種の魔術にちがいないと思つた。しかしその直後に高名な科学者ゴールドベルクがローザの指先視覚を本物として取り上げていることが明らかになつたのである。

この大会のあとでゴールドベルクはローザをスベルドロフスク大学へ送つてもっとテストを受けさせることにした。大学の科学者たちはローザの能力を否定も説明もできなかった。次に彼女はモスクワへ送られてソ連のトップレベルの視覚専門家連からテストを受けることになつた。テストを受ければ受けるほど成績が向上する。次第に彼女はもっといろいろなことがやれることを発見した。ラズランは彼女の超能力を「まさ

に歴史的だ」と評している。

ソ連の科学者が報告した彼女の能力のなかには次のようなものがある。しっかりと目隠しをされたローザは、まるで目をあけているのと同じような早さで新聞や雑誌の見出しや子供の本の大きな活字を読むことができる。もっとゆっくりやれば普通の新聞記事が正確に読めるのである。

またアガニョークやクロコディルのような大衆向刊行物のさし絵などを説明できるし、タバコの箱や郵便切手の絵もわかる。また色紙や色のついたエンピツ、アニリン染料、木綿糸、布などの黒、白、赤、オレンジ、黄、青、緑などを区別するのに全然困難を感じない。

ラズランは言う。「これらはすべて明るく照明された室内で行なわれたものである。部屋を暗くしたり黒い袋の中に材料を入れたりするとローザの能力はいちじるしく減退するが、これは全然問題ではなかつた。暗い室内で彼女はなおも大きな文字や文章をいくらか読み分けることができたし、日によっては木綿のネクタイ、クツ下、シャツ、色紙、エンピツ、粉末アニリン染料などの色を言いあてることができたのである」ラズランが黒い袋の中にトランプのカードを入れると、ローザは感覚だけで指定のカードを抜き出すことができた。

練習によつてローザは自分のDOP能力の別な面を開発していった。やがて彼女はガラスやセロファンを透して紙や布の色を言いあてたり、ガラス管中の液体の色やオシロスコープのスクリーンからも読み分けをやることができるようになった。或るとき、科学者たちがローザの前に一冊の緑色の本を置き、それに赤の光線をあてたことがある。いつものように目隠しをされたローザはその本に手を触れて青だと言う。その瞬間はたしかに青だったのである。赤色光線が除かれるとローザは喜びの声を放つた。その本の色が突然変わったというのだ。ローザは足のつま

先にもDOPの能力をつけることができたし、ライフ誌のモスクワ通信員がインタビューした時にはすでに既に色を見分けるようになっていたのである。

この驚くべき能力にもかかわらず、簡単にやれそうなことだと思われ、るのにローザにできない事がいろいろあった。まず金属または木箱の表面の明るい色や明瞭な図形が見分けられない。また、色のついたガラスやプラスチックも判別できない。それに茶色と灰色の区別がうまくゆかないのだ。

しかしローザの能力があまりにすばらしいためにロシア人たちは彼女をテレビに出させることにした。そこで「リレー」と題する新しい番組に出演したが、それは四千万ないし四千万人の視聴者が見たといわれている。ローザはわずか十分間だけテレビスクリーンに現われたにすぎないが、その実演がもととなって指先視覚テストが国中の客間ゲームとなって大流行したのである。しかもこのためにローザの競争者が出現することになった。この競争者が演じる能力はまさにものすごいもので、ローザの能力を上回るものであった。

### 少女レーナのすごい能力

ウクライナのハリコフでローザのモスクワテレビ番組を見ていたのは或る医師の妻オルガ・ブリズノワである。ショーが終わった時、ブリズノワ夫人は自分の九才の娘レーナを面白半分を試してみることにした。レーナを目隠ししてチェスのセットの前にすわらせ、コマをまぜたあと白と黒を見分けるように命じたのである。

すぐに、しかも容易にレーナは正確に白と黒のコマを分けた。更に試

したあとブリズノワ夫人はハリコフの或る科学者のところへ娘をつれて行き、まもなくレーナも脚光をあびるようになったのである。

しかしレーナはローザと同じような科学的検査を受けなかったため、その能力を評価した技術的な報告書はまだ公にされていない。レーナが科学者連に会った時の模様を報じた次の記事は、イズベスチャ紙の日曜版に掲載されたものである。

「科学者集団は九才のレーノチュカ・ブリズノワが両手で「読み取る」能力にア然としてしまった。彼らは異なる色で印刷された文字表と、両手の指で材料にほとんど触れないでしかも各色や文字を正確に言いあてる少女の前にむらがっていた。

頑迷で疑い深い検査者たちはレーナの目隠しを調べ、のぞき見をしてはいないかと検査したりして安心してから、色紙の標本を少女の背後に置いた。レーナは背後に手を伸ばして確信に満ちた調子で言った。「青・・・そして、これは緑と白のシマです」

高名な神経病理学者、催眠術による精神療法学者、精神病学者たちは互いに驚いて顔を見合わせた。「イワン・ブリズノワ医師の娘であるこの少女はほんとうに皮膚で「見る」のだろうか？」

科学者たちは実験を複雑にした。彼らは異なる色の紙をつみかさねてその中から色を言いあてるように命じたのである。彼女は紙の束を動かさないで、その一番上の紙に触れただけで各色を正確に順序どおりに言いあてたのである。しかも数冊の厚い書物の下に隠された或る絵を「見る」ことができたのだ！」

この説明が正しいとすれば、DOPは普通の視力ではやれないことがやれるということになる。しかもレーナは指を一、二インチ上方にかざしながら、全然物に触れないで形、色、大きな文字などを見分けること

ができるのである。これはローザが最初はできなかったことなので、しかもレーナは最初から指先ばかりでなくつま先、足、肩、臂などで見ることができた。

ラズランのような信じる人ですらこれをすべて受け入れるのは少々困難なのである。特に書物をつみかさねて見るというのは理解できない。彼は信頼し得る技術的な報告書が公にされるまではレーナの能力に関する如何なる記事をもウ呑みにするのは注意する方がよいと忠告している。これと同じことがスベルドロフスキの盲目の少女で恐るべきDOP能力を持つといわれるナージャ・ロバノワに関する報告類にもあてはまるのである。

## レオンティエフのすばらしい実験

ローザ・クレシヨワ嬢が脚光をあびてだれもが皮膚視覚能力についてまじめに考えるようになるずっと以前の一九五〇年に、アレクセイ・レオンティエフというロシア人心理学者が一連のすばらしい実験をやった。パプロフは犬に条件をつけてベルを鳴らしては過度にヨダレを出させたが、レオンティエフは人間に条件をつけて潜在意識的刺激に対して反応を起こさせることはできないものかと考えた。被験者のてのひらにまず緑色の光をあてて——これは被験者には見えない——次に瞬間的に電気ショックを与えるのである。これは条件づけ実験でよく用いられる有名な「ショックと回避」という実験法である。

この場合、ショックを避けるためには被験者は緑色の光がてのひらに輝いたとたんに電気のキーを指から離さなくてはならない。被験者は一度コツがわかればあとは正確にやるようになった。これで判明したのは

人間のてのひらはどういうわけか色光を感じる事が可能であるということだった。しかも何ら意識的な感じを起さずそれでできることもわかったのである。レオンティエフは実験を続けてついに一被験者が緑の色光と赤色光とを区別できるところまでこぎつけた。

「レオンティエフのこのすばらしい実験を追跡した人は今までにいないようだが、こうなれば熱心に追跡されるだろう」とラズランは言う。

現在DOP問題を扱ってその解決を求めているソ連の或る強力な科学委員会をひきいているのはレオンティエフである。この委員会は心理学、生物学、化学、物理学、内科等の分野にわたるソ連のトップクラスの科学者から成っている。彼には絶対的な信頼があり、モスクワ大学心理学部長、ソ連教育アカデミー会員、全ソ心理学者協会々長を兼任しており、レーニン賞受賞者でもある。「DOPの結果についてはまだ何も言えない。というのは、われわれは報告書の公開を急がないことにしているからだ。これらの驚くべき実験には最新の学問による最大の配慮を必要とする。せっかちな結論を排して厳正なコントロールが必要なのだ」とレオンティエフは言う。

DOPに対して個人的な意見を求められた彼は次のように語った。「今のところこの現象は本物だと言いたい。しかも特殊な訓練をすればそのことは多くの実例のなかに見出せるはずだ」

## DOPは訓練によつて開発できる

レオンティエフ委員会によつて精査される研究計画のリストにはアラム・ノボメイスキーの研究が上位を占めている。彼の心理学研究室でローザが初期のテストを受けたのである。ローザの能力が本物であるこ

とを確信したノボメイスキーは、DOPが訓練で開発できるかどうかを知るために一連の独自の調査を開始した。彼は一人の被験者を選んで目隠しをし、その前に二枚の四角な色紙を置いた。次に右手の中ほどの三本の指で各色を静かになでて、その時わき起こる感じに精神を集中し、その感じを言えと命じた。この色紙は交互に一分間ずつなでられて、それを三十分間続けた。こうして色を見分けることができるかどうかテストされたのである。一組の色がうまくゆくようになったら他の色で試みた。

被験者が進歩してくると、ノボメイスキーは本人をゆっくりと忍耐強く次のステップに導いた。「ノボメイスキーが用いた被験者の内、六人に一人ぐらいの割合で、黒と白及び七色のなかから五つまでは正確に言っていることができるようになった」とラズランは言う。

またノボメイスキーの被験者たちはローザやレーナの持つ能力の多くをまねる力があると考えられている——すなわち離れた位置から色や形を言いあてたり、色紙の束の最上端の色に触れるだけで各紙の色を指摘したりする能力である。更にノボメイスキーは被験者たちが薄い銅板や真鍮板を透して色を識別するようになったと報告している。

米國やソ連で科学的な論争をひき起こしたのはノボメイスキーのこの一連の主張——不透明な覆いを透して見る能力が存在するという主張なのである。DOPの理論上の可能性を認めようとする人たちのなかにもこの点を疑問視して、ノボメイスキーの実験の仕方をもっとよく見せろと言う人もある。レオンティエフ自身は次のように断言する。「不透明な物質を透して皮膚で見るといふこの能力を証明された科学的事実として語ることは不可能だ」

### 色からどんな感じを受けるか

種々のDOPのテストを受けて自分が受ける感じを述べたアメリカ人のスタンリー夫人は、明るい色はなめらかで希薄な感じがし、暗い色は粗雑な重々しい感じがすると言っている。ローザもなめらかさについて述べたが、「波状の」とか「点々のある」とか「交叉したような」という言葉を用いている。ノボメイスキーの被験者たちもこの点では一致している。黄色はつるつるした、柔らかい、軽やかな感じがするというのだ。青は黄色ほどにつるつるしてはいないが、もっとなめらかで、その上を手がもっと自由に動くという。赤はねばっこい、くっつくような感じ。緑は赤よりももっとねばっこいが、赤や緑よりも固い感じ。紫色は少し粗くて、オレンジ色よりも抵抗のある感じ。黒には非常な抵抗感がある、しかも粘着性があり、一方、白は全くなめらかだが、黄色ほどではない。

以上の各種の感じは片手が色のある材料に触れている時だけ感じられるのである。触れないで色を感じる場合は、大体に寒暖または痛みや圧力感などで感じられる。赤は熱い感じがする。しかもまるで炎の上を手をかざして焼けるような感じであり、オレンジも暖かいが、焼けるほどではない。黄色は奇妙なことに暖かい感じと冷たい感じとをくり返す。緑色は暖かくも冷たくもないが、なんだか圧迫するようなものがあるという。青は冷たい。藍色は冷たくて凍りそうだ。紫はすごく冷たくてひりひりする。その痛みは赤の焼けるような痛みとは異なって、もっとひどい。

以上の表現は全く主観的なものであろうが、主観的であらうとなかる

うと、こうしたいろいろな感じによって能力者は色を識別できるのである。このような感じを起こさせる何か客観的な物理的実体があるにちがいないと確信しているのはラズランである。この物理的実体とは何だろうか？ 如何なる種類の放射線が材料から放射されて皮膚に必要な刺激を与えるのだろうか？ それとも皮膚自体がレーダーのように実験者から被験者へ何かのメッセージをはね返させているのだろうか？ 米国のユーツ博士もソ連の科学者も「二人目隠しテスト」を行なった。すなわち実験者も材料を見ないようにして行なうテストである。その結果、やはり被験者が色や形を正確に言いあてるといふ事実が出て、テレパシーによる伝達ではないことがわかった。結局DOPによる感知は決定的に感覚的なものである。ただしこの感覚は新しい未確認の感覚であると言えるだろう。その理由は次のとおりである。

◎これは手で触れる材料のきめのごくわずかな相違を識別するような事柄ではない。もしそうだとすれば、この識別はガラスその他の透明物質を透して行なわれるはずはない。

◎これは皮膚の表面または下部にある特殊な光受容器によって普通の光の波動を感じる現象でもなさそうだ。これはソ連の有力な説であったがもう見捨てられている。DOPはアルミ箔や真鍮や銅の薄板を透してでも行なわれるとノボメイスキーが主張しているが、これらはスペクトルの可視光線のすべてを妨げる障壁となるのである。スタンリー夫人は光を遮断した箱の中に両手をつっ込んで色を言いあてることができたのだ。

これは赤外線または熱による現象なのかもしれない。もっともその点では米ソ科学者の考えがまちまちである。ローザは赤外線よげの一連のフィルターを透して色光を感知することができたのである。一カユニット

はスタンリー夫人の能力は赤外線による現象なのかもしれないと信じている。このような食い違いは、能力者が異なれば刺激に対する反応も異なるということなのかもしれない。

そうすると有望な説明は何だろうか？

### DOPは電気的なものか

ノボメイスキーはこの現象が何か電気と関係があると考えて、これを「電気的な色場」と呼んでいる。そして或る有能な能力者が薄い金属板を透してDOPを行なう例を重要なキーとしてこれに言及している。なぜなら金属板または被験者の手が電氣的にアースしてあると、被験者の能力が次第に減退して、ついには指先で色や形を言いあてることが不可能にさえなるからだ。しかし金属板にチャージすると（八十ボルト正電気）能力が好転する。足の下にゴムのマットを置いて絶縁し、事前に絹かウールで手をこすって静電気を発生させてもよい。

しかしDOP現象が電氣的な場によるものだとしても、これは物理学者が知っているような電場とは異なるものらしい。一つには、普通の電界はノボメイスキーが言うように薄い金属板を通らないからだ。金属板は電界を散らしてしまうし、そのために板の下にある材料によって電界にしるされると思われる形の痕跡が消されてしまうのである。更に別な難点がある。電界に関して現在認められているあらゆる学説によれば、金属板がアースされたときにDOP現象は瞬間的に消滅するはずであるが、しかるにノボメイスキーは自分の被験者の例をあげて、DOPが「次第に」減退すると報告しているのである。

或る点ではノボメイスキーの言っている実験はむしろ磁場の働きに関

連がある。磁場は彼が用いた非鉄金属によって散らされないのだ。磁場と関係があるかもしれないという考え方は、指が動いている時、しかもごく小さな前後運動にすぎない時でも色や形をきわめて容易に感知できるといふ事実と矛盾しない。

また或る人々は或る種の電気に対して未知の感覚を持っているのかもしれないと仮定しても不合理ではない。たとえば二種類の魚がいる。フリカのモルミルス属と南米の電気ウナギである。これらは自分のからだの周囲に電界を発生させ、この電界の中に岩や他の魚によって起こされる動揺を感知することによって相手を「見る」のである。

## 結局は謎？

しかしこれらの電界に関する考え方はまだ多くの不可解な点を残している。一体どうやって一本の指が離れた位置で或るイメージに焦点を合わせる事ができるのだろうか？ 一体なぜ人間がすみかさねた紙の最上端の一枚に触れるだけで中味のすべてを言ひあてることができるのだろうか？ 各色から来る印象類が互いに干渉し合わないのだろうか？ レーザ・ブリズノワはどのようにしてすみかさねた書物の底にある絵を見ることができのだろうか？ なぜ書物の中の絵などがごたまぜになって見えないのだろうか？

ラズランは以上のような疑問に対してははっきりとした意見を述べない。「われわれが今やらねばならないことは熱烈な研究である。学説はその後に起こればよい。次の段階のテストによって反ばくされるかもしれないような巧みな学説を作り出しても意味はない」と言う。

ラズランはすでに自分自身の実験を始めており、そのために弟子の最

優秀な大学院生を幾人か使っている。ユーツ博士も——彼はソ連の科学者の研究ばかりでなく自分が行なったスタンリー夫人との最初の実験からも感銘を受けたのだが——バーナード大学の弟子の学生たちをテストしている。彼がまず発見したのは学生たちのうち少なくとも十パーセントは初歩的なDOP能力を持っているということである。ただしそのなかで最優秀な者でさえもローザやスタンリー夫人の足元にも及ばなかった。スタンリー夫人は能力がおとろえたりとはいへ、まだ相当なDOPの感受力を持っているのである。

ニューヨーク州オレンジバークのロックランド州立病院の科学者マンフレッド・クラインズは、コンピュータによって普通の視覚から脳の外層に発生する電気の働きを分析している。同じような電気の働きが指から伝達される視覚の感じからもひき起こされるかどうかも研究中である。ラズラン自身はニューヨークのアルバート・アインシュタイン医大の神経精神病学者シドニー・ワインシュタイン博士と共同研究でテストするためにDOPの能力者を探している。

## 何が見つかるかかわかったものではない

たぶんDOPの現象そのものよりも驚くべき現象は、この問題を研究したがっている高名な学者が沢山いるということであろう。ラズランは言う。「この問題にはまだ信じがたいものがある。われわれの完備された研究室でソ連と同じような結果が出るまでは、われわれは完全に信じるわけにはゆかない。われわれがやらねばならぬことは、DOPとは何か、だれがそれをうまくやれるか、どんな特殊な環境下でやれるのか、というようなことを確実につきとめることである。これらの事柄がわか

# 実践記

ここに掲載したのはアダムスキー哲学を實踐される二名の方の尊い体験記である。市川英一氏は日本GAP大阪支部代表市川宏氏の令息で、中学三年生。中二頃より想念観察を始めたというまれにみる人格の持主。三田英一氏は群馬県立大泉高校教員で一種の透視力を持たれる高貴な精神の持主である。

## ぼくの想念観察体験

市川 英一

ぼくが想念観察記録を始めたのは去年の九月ごろからです。その方法はずっと前から知っていましたが、想念観察を始める前までは円盤問題ばかりに興味をもっていたのでそういうことはあまり気にしていませんでした。アダムスキーの本も写真を見る程度でしかなかったです。

ところが去年の八月ごろから急にアダムスキーの本を読み出しました。それがもう、おもしろくてたまらず、後から後からどんどん読んでいきました。最初読んだとき、アダムスキーの哲学の方は理解しにくかったですが、今では少しずつでも理解しているような気がします。でもそれを正しく理解しているかどうかはわかりません。とにかくだんだん読んでいるうちに想念観察の重要性を知ることになりました。

した。ぼくはあきつぼくで、長い間続いたというのは何ひとつありませんでした。それまでがそんなふうでしたから、今度こそはという意気こみと、アダムスキーの本の感動もあつて想念観察をとにかく続けてやろうという気持になりました。続けてやろうというよりも、自分を発達させたい、そういう気持が多かったかもしれません。

それからぼくは必死で想念観察を続けました。もつと気を楽にもつてやればよかつたと思います。起きているときはいつもポケットに小さな手帳と鉛筆を入れ、寝ているときはそれに懐中電燈を加えて、まくらもとに置き観察しました。実際、これほど苦しいものとは思っていませんでした。寝ているときは特にそうで、ねむたいのを我慢して観察するのはぼくにとつてつらい仕事でした。夜、あまり寝られなかつた日が多かつたです。けれども効果は意外と早く出てきました。なんだか楽しい気分になり、心がおおむらになりました。それからこんなこともありました。今まであまり気が合わなくてつきあいの少なかつた人が、急にわざわざ家によんでくれていろいろな方法でぼくをもてなしてくれたのです。その日はほんとうに楽しい一日でした。

そのころまでは想念観察も順調にいっていたのですが、どういうわけかだんだん観察がおっくうになつてきて、やったりやらなかつたりの日が続いてとうとうやめてしまいました。それから想念観察する前の自分にもどつてしまつて数日間たち、ようやく

くこれではいけないと思つてまたやり始めましたが、心は楽な方へ楽な方へと走るのでなかなかうまくいきませんでした。それでのらりくらりと暮らしながら年が明け、一月の終りごろ、ニューズレター第四十八号がうちに届きました。その中で「私の想念観察法」の藤原さんの手記に「数取り器による想念観察法」がありました。ぼくはそれに心を動かされました。あの信念と忍耐力にはほんとうに頭が下がります。藤原さんまでには到抵及ばないと思いましたが、数取り器法を少しずつでもやつていけそうな気がしてさっそく始めました。ぼくの場合、数取り器をポケットに入れて観察しました。それから想念観察記録と想念観察日記をつけるようにしました。観察記録は宇宙的思想とエゴ的思想の一日の集計を記録していくだけです。観察日記は書くことのある日だけ、その日の感想やこれからの目標などを書いていきます。そんなものを始めてからまだ約四カ月にしかなりませんが、日記と記録とを合わせて読み返してみるとなかなかおもしろいです。日記と記録は大学ノートを半分に分けてべつべつに書いています。

今、考えてみるとよくもまあ観察を続けてこれたと思います。たった一年たらずですが、ぼくにはとても長いように感じられます。今ではもう習慣になつて苦痛を感じなくなり、とても楽になりました。かえつて数取り器を持っていない方がなにか物足りない気がします。

数取り器で想念観察を始めてからまもなく、こん

なことがありました。数取り器の数が今どれくらい  
 いているかなと思ってポケットに手をつっこんだ  
 瞬間、自分では知らないうちに

「十八か」

とっているのです。数取り器を見てみるとやはり  
 そうでした。その時のぼくの驚きようははたから見  
 ているととてもおかしかったと思います。寒けがし  
 て足ががくがく震え出しました。最近では、クイズ  
 でときどき自分の知らない解答がぼかっと口から飛  
 び出したこともありましたが、でもそういうことはほ  
 んのまれにしかありません。

過去にとらわれまい

最近ぼくは、父からときどきGAP例会や総会の  
 録音テープをかしてもらって聞いています。その中  
 でぼくにとって、とてもありがたいものがありまし  
 た。昭和四十六年八月十五日の日本GAP大阪支部  
 大会のときの久保田先生の宇宙哲学講義だったと思  
 います。

「過去にとらわれるな。過去を思いつめることは未  
 来に大きく影響する」

だいたいそんな意味でした。ぼくは心配症で前ま  
 で、いつも思いつめても何にもならないことを考え  
 ていました。想念観察を始めてからだいぶなくなり  
 ましたが、それでも根強く残ってぼくの進歩を妨げ  
 ていました。ぼくはテープを聞いてこれは絶対にな  
 くさなくてはならないと思い、あくる日からそれを

想念観察日記'72

4月12日 このところあまり調子がよくない。  
 22日 今日、天62地60。でもすわったとき  
 などに数取り器がかかってに押される場  
 合があるのであてにならない。  
 5月12日 非常に悪かった。もっと自覚しよう。

想念観察記録

天

日	1	2	3	4	5	6	7	8
数	114	34	43	19	39	26	72	56
日	9	10	11	12	13	14	15	16
数	70	45	10	15	22	27	5	16
日	17	18	19	20	21	22	23	24
数	14	8	16	6		62	14	12
日	25	26	27	28	29	30		
数	7	20	32	18	11	14		

地

日	1	2	3	4	5	6	7	8
数	165	104	106	118	287	265	372	285
日	9	10	11	12	13	14	15	16
数	402	258	101	65	39	58	57	83
日	17	18	19	20	21	22	23	24
数	69	59	44	62	38	60	47	100
日	25	26	27	28	29	30		
数	59	130	88	132	37	97		

徹底的に観察しチェックして未来に希望を持つよう  
 にしていきました。今では想像の数がだいぶ減って  
 きています。小さなことにくよくよしなくなっ  
 て五十点以下は教室に残って再テストをやられ  
 ることになっていきます。学校の帰りに友達と解答に  
 ついて話し合いながら帰りましたが、解答を聞いて  
 いるうちにだんだん残される可能性が大きくなっ  
 てきました。でも今ではそんなちっぽけなことでは  
 よくありません。ぼくのもうひとりの友達は今ま  
 のぼくよりずっと心配症で神経質でノイローゼにな

らないかなと思うほどです。その人を見てみると今  
 までのぼくを見ていたようでほんとに気の毒に思い、  
 GAP方面のことを話してみましたがやはり受けつ  
 けてくれなかったようです。急に話しても無理だと  
 思いますから、少しずつ話していくことにしました。  
 とにかく今はとても幸せな毎日を送っています。想  
 念観察記録ものんびりと末長くやっていたいと思  
 っています。ぼくがこれを始められたのも直接的に  
 も間接的にもアダムスキーやGAPのみなさんのお  
 かげと思っ心から感謝しています。ありがとうございました。



## アダムスキーの 哲学に接して

三 田 堯 一

人生には起伏があり、安楽な行路もあろうが、また幾多の苦悩も次々と伴なうものである。人間がこの宇宙の最高の存在として創造されたとき、全知全能なる創造主より大幅な自由が人間に与えられた。人間を通してこの宇宙を真に最高のものとして築き上げるためである。

しかし、現代の人間は、この創造主の目的に適った行動をしているであろうか。この世の人間の生活には、多くの苦悩があり、多くの人々の人生も、それぞれの壁にぶつかっていることが多い。現代においてはこの傾向が特に著しく、騒然たる世情の中に深く入り込んでしまっている人々の中には、泥沼の中の自己の姿さえ見出せない者も少なくない。

人間は最高の存在と言われているにもかかわらず、何故このように多くの苦難に出合うのであろうか。私たちの職場に家庭に多くの摩擦と苦悩がある。

私は十年ほど前に、職場の混乱の中で何ともやりようのない状態であった。殆どの人が自己の保身と

安泰のみを考え、一皮むくと、聞くのもいやな想念の渦が巻いていました。その上自分の一身上のことでも苦悩がふりかかってきて、どうにもならない気持ちでした。このとき、夜遅く職場から帰宅する人一人いない田舎道で自転車を止め、きれいな夜空をつくづく眺めました。星座がきれいに輝き、オリオン星々がひととき雄大に天空に輝いていました。どうにもやり切れない状態の私が、夜空に輝く星々を見つめているとき、天に祈るような気がわいてくるのに気づき、両手を合掌しました。心底から祈るような気持ちになったのは、これが生まれて初めてでした。このときかつてアダムスキーの「空飛ぶ円盤実見記・同乗記」を読んだことが頭に浮かんできました。どうせこんな世の中ならいっそのこと宇宙や空飛ぶ円盤のことなど調べたりして一生を送るうかと思いました。訳者（久保田先生）に連絡を取ってみようかと思いましたが、この時はついにそのままになってしまいました。

その後、三年ばかりして妻が長男を出産してから胃痛に悩まされることが度々でした。胃潰瘍ということですが、通院して投薬を受けているときは好調ですが、調子がしばらく良いからと言って通院を止めると間もなく再発するという繰り返しがいく度か続きました。こんなとき私が出た三日ばかり、かなりの高熱と腹痛で苦しみました。このため勤めを休まなければなりませんでしたが、勤めを三日も休んだのは初めてでした。健康には生来恵まれてい

ると思っていた私には、これはたいへんな衝撃でした。いつもなら風邪をひく位で、体の調子の悪いときには一晩寝れば完全に回復したものでした。こんなことがあってから健康ということに関心を持ち、いろいろ調査研究もしてみました。そのうち妻の胃潰瘍も通院せずに、玄米菜食で治りました。

やがて、この健康や医学の研究は、人間は何のために生きるかという方向に広がりました。この時にもアダムスキー氏の著書が頭に浮かび、「空飛ぶ円盤の真相」の中に健康や医学についての内容が少しあったことが、ふと頭に浮かび上がってきました。そこで訳者あてに連絡を取れば、もっと広く深く知識が得られるのではないかと考えてになりました。

結局これがGAPに私が接近する動機となりました。アダムスキーの著書類は私の人生のあり方について、大きな示唆を与えたばかりでなく、多大の喜びと勇気をも与えてくれました。学生時代の哲学や教育などで与えられたものとは比較にならないほど明せきで深遠なものを心の底から実感することができ、私が以前から求めていたものは正にこれであるという充実した感じに打たれました。

結局は、この社会を真に平和な明かるいものにするには、聖書の中の放蕩息子がやったように、私たちひとりびとりが創造主の目的に帰るといふことです。この地上の世界を平和と調和と理解の満ちあふれる園にしていくことです。

ところが、現実には人間は、この社会の混乱した

雑踏の中で、どうかすると気まぐれな流れにただ流されていく自己を発見することもあります。アダムスキーは人間にとって、とりわけ地球人にとって、自己の想念を謙虚な態度で観察し、これをコントロールすることをすすめています。私たちがテレパシーの能力を開発するにも、この想念観察は第一に実行せねばならないことでしょう。

私たちは、雑多な想念の海の中に生き、自分が意識しているか否かを問わず想念を受け入れたり、発したりしています。これらの想念が我々の知らないうちに、我々を動かしています。

人間の行動について論じられるとき、通常人と人との関係がよく取り上げられますが、人間の想念は人との間においてのみやり取りされるのでなく、アダムスキーによれば、実際には肉体の原子そのもの自然のあらゆる物などとも想念のやりとりをします。人間は他人との心の印象を交換するのが容易なように、動物はもろんのこと、植木、野菜、樹木その他無機物などとも印象を交換することもできます。

アダムスキーの「生命の科学」第十課では、「或る場合には印象は静かな小声のようにやってくる場合があります。するとあなたは、誰かが自分に話しかけているのだらうと思うでしょうが、それはあなたの意識が言葉でもって物事を説明しているのです。

また時にはどう表現してよいかわからないような印象も来ることがあります。しかし、遠方の光景を透

視する場合は——特にそれがカラーであるとき——それはあなたの頭の中にある心のスクリーン上に意識によってピントが合わされます」とあります。

四年前、私が「生命の科学」の学習により透視現象を体験するようになった頃のことですが、朝気分よく目覚めて部屋の中を見廻し、ふと前方の壁に顔を向けたとき奇妙なものが映り始めました。壁の一部分がスクリーンのようで輪郭はぼけていましたが、実にきれいな緑の葉がたくさん一面に現われてきました。これが躍動的で実にきれいで、みずみずしい気分になりました。畑のところ狭しとばかり生えてきた緑の葉が、やがて見る間に拡大され、一枚一枚の葉の中の細胞の活動が見られるようになりました。内部の細胞液が立体的に躍動しているのがよくわかるのです。このきれいな動きは、まるで大きな顕微鏡をのぞいているようです。この葉は私が畑でたいへんよく手入れをして育てたコンフリーであることが、どういう訳か印象で解るのでした。やがて映像は静かに消え去りましたが、感動のあまりその時の状況を詳細にメモした程でした。

これは私のコンフリーに対する気持がコンフリーに通じ、これに応えて起こったのでしょう。「土壌の構造も肥料もたいへん理想的な状態です。こんなに元気で各細胞が活動していますよ」ということでしょう。

このことは一般には認められない奇妙なことでしょうが、アダムスキーの著書から多くを学び取って

いる者にとっては、いずれ自然に体験を通じて理解されることでしょう。人間は、宇宙の万物と時間空間を超越して印象で語り合うことができましょう。

私たちは無意識のうちにも、いろいろの印象と語り合いながら自らの想念を活動させています。この地上の人間の作り上げた複雑な社会機構の中で、私たちはどうかすると雑多な想念の海の中で、知らず知らずのうちに低次の想念の虜となり、流れのままに流され、自己の姿を見失うことにもなりかねません。自己の欲望や感情の赴くままに心が動かされ、言動も単にこれに支配され、この状態が継続すると惨めなどん底に陥ってしまう人々もあります。

アダムスキーの哲学に接し、想念観察をして自己の想念を高く向上させようとする私たちは実に幸福です。あらゆる機会を通じ、自己のセンスマインドを宇宙の意識に向け、これと一体化させねばなりません。あらゆる方法を案出して、自己の習慣的想念に浸っていた肉体の心を、創造主の意識に向けなければなりません。挫折または再出発の繰り返しになつてしまつてもよい。忍耐をもって永続させねばなりません。これによって肉体の心を支配でき、気まぐれな心の赴くままに言動するのでなく、真我のささやきに謙虚に従い、内部からの導きに心を傾けなければなりません。この時、心は真我につき従う真の召使いとなるでしょう。

このように進歩するとき、今の自分にどういふことが真に必要なか、自己の天性にふさわしい現

在の自分の状態にかなった真価を有する数々の助言が、人生の道を指し示す知恵が宇宙的な印象の中に難なく感じ取れるようになりましょう。これは全能なる創造主の大きいなる導きであると言えるのです。

私は、想念観察と併行して、いや一部と言えぬかも知れませんが、一日の終り、つまり就寝前に家族が寝入った後、ライトを暗くし、身体はすわって楽なリラクセスした姿勢で、筋肉の緊張をゆるめ、静かに眼を閉じて、ある程度雑念の静まりを見て、今日創造主より偉大な生を受け、ここにこうして大自然によって生かされていることに感謝し、その日の想念を朝から時間を追って思い起こし、分析反省を加えます。そして全知全能なる創造主に、その日の自分が見過ごしたであろう誤りに対しても許しを乞うとともに、創造主の目的にかなった行いが、明日はできるよう、知恵と力を与えられるよう念ずるのです。そのあとは創造主の意識にゆだね、無念無想で床につくのです。

これを特に人にすすめようというのではありませんが、これは自分の心の動きをかなり冷静に見つめる力にもなり、思いのほか心に平安と静けさを与えてくれます。しかし、自分の中の苦悩した姿も以前よりははっきりと捕えられるので、ある意味では苦痛ですが、これもレッスンのひとつであると思ってい

のレッスンをやってくるのです。アダムスキーが言っているように、自分の中でこぼこを削り取る度に苦痛を伴いますが、多くの苦痛に耐えれば、それだけ立派になるでしょう。

人生において出合う障害は、その殆どが自己のレッスンのようです。家族の病氣も、職場での混乱も、仕事の行き詰まりも、何か人間に創造主の道に帰ることに気付けさせるためのヒントであるとも言えましょう。苦難に直面した時の自己は、たいへんつらいものですが、過ぎ去ってみると、たいへんよい経験をし、収穫を得たものだ、つくづく考えることが

### UFOが接近した！ 牧野繁雄

このUFO目撃事件は私にとりまして初めての出来事ですが、今もなお強烈な印象として記憶に残っております。

目撃場所は埼玉県所沢市の上空です。東京池袋駅から西武池袋線に乗り替えて四十分、西所沢駅から歩いて五、六分の所にある私のアパートの近くでこの事件は発生したのです。

昭和四十七年六月十日(土)午後九時すぎに銭湯を出た私は、いつものように夜空を見上げながら帰途につきました。その夜は空も晴れていて月も出ていたのを覚えております。そもそも私が円盤・宇宙人問題に興味を持ち始めたのが小学五、六年の頃ですから、かれこれ十年あまりになりますが、まだ一度も円盤目撃はなかったわけですが、このようなわけ前々から円盤を見たに、特に最近ですとおフロの行き帰りに空を見上げるのが習慣になっていたのです。当日も星を見ながら、あの星が動きはしないか、急に消えはしないだろうかどと近いながら歩いていました。いよいよアパートの近くを流れる小川の橋を渡ったその時です。私の立っている場所から見て右傾斜上空に異様に輝く一個の星(最初は何かと思った)を見つけたのです。星といっても普通の星とはかなり輝き方が違っていたし、私の感じるその星の六・七倍はあったと思われるくらい大きな物でした。直感で円盤では? と思ってその星を凝視しつつ今来た道を三十分位位逆もどりしてその物体に近づいてくると、最初顔の上で見た時その物体は星が二個ならんてく

あります。

私たちは、ただ一筋に勇気をもって創造主の意志にかなった自己の道を歩み出し、自己を向上させ、もはや苦難の無い、ほんとうに自由な、より豊かな人生を送れるようにならなければなりません。そして互いに助け合い、尊敬し愛し合い、理解し合って共に生活することのできる、地上に真の幸福と平和をもたらし、真に、この宇宙の主人公として、神が定め給うた宇宙の最高の存在とならねばならないのです。そのためにもアダムスキー哲学を研究実践し合おうではありませんか。

ついでに見えましたが、近づくにつれて一個の物体に見えてきました。立ちどまって見ている時間が三十秒前後かと思っただけの直後、今までのように輝いていた物体が急に電球の消えるがごとくにパッと見えなくなったのです。そして驚くなけれ、ほんの二、三秒間ですが、私の方に物体がむかって来たのです。その驚きようといったら読者にも想像いただけたらと思います。(むしろ恐怖心を起こしたという方が適切かもしれません)その証拠として二、三歩後退したのを覚えております。私にむかって来て止まった物体との距離は、二百一三メートル位かと思っております。ですから最初星状に輝いていた物体との距離はかなりあったと思えます。更に驚くことはいえ、今度は私から見て右方向、ちょうど西所沢駅の方に移動し始めたのです。夜のになぜそのような事がわかったかと申しますと、赤いランプ状の物が三、四個確認されたからです。円盤の底部と思われる所に三、四個の丸く赤い光。たものが右回転しながらまわっていました(着陸用ギヤードかと思う)。その後にも回転しない赤い同様の物が一個見えました。この丸く赤い光は全部消滅していきなかつたので、飛行機ではないかと思われると思います。またスピードは旅客機より少し速い位で、もちろん全然無音でした。そして残念ながら視界からだんだんと消え去ったのです。目撃時刻は九時二十分前後の二分間位でした。以上で私のUFO目撃報告を終りますが、読者の皆様にはいかが御覧いただけましたでしょうか。とにかく、ひまがあるたら空を見上げてはいかがですか。あなたのそばにも飛んで来るかもしれませんよ。

# スペース・プログラム

久保田八郎

年月の経過は早いものでして、私がアダムスキーの紹介活動を始めてから二十年近くになり、日本GAPを創立して以来十一年になります。回想すればその間の多くの出来事が走馬燈のように脳裏を去来します。奇妙な事件に巻き込まれたり、不思議な現象を見聞したり、多数の人に会っては褒められたり罵倒されたり、一万数千通の手紙に接したり(そのほとんどは感謝と激励の言葉に満ちたものでした)、その返事を書いたり、和文タイプライターを打ち続けたり、われながらよくもここまでやってきたものだと思ったり感心したりしている次第です。もちろんこれは私一人の力ではなく、多数の方々の温かいご援助のたまものと心から感謝しておりますが、こうしてさまざまのすばらしい体験を持ったこと自体が私にとってこよなきレッスンになったと思ひ、人生の不可思議さを痛感しますとともに、お世話になった方々へあらためて深甚の謝意を表する次第です。

## アダムスキー哲学は難解ではない

アダムスキーの哲学は難解だとよくいわれますが、説かれている内容は平易なのであって、むづかしいのはその実践だろうと思ひます。人間のセンスマインド(感覚器官)によって形成される心(内部)にひそむソウルマインド(宇宙の意識・英知・パワー)と一体化せしめて、宇宙的なフィーリング(感覚)によって生きようというのがその中心思想ですが、そのためにまず想念観察を実行して自分の想念パタ

ンをはっきりと知ってかかることが必要で、これをやらないといつまでたつても自分の想念傾向を直視することになりませんから、宇宙的印象がやってもそれに気づかないことになります。「自分の心の中は自分が一番よく知っているよ」と普通の人は言うでしょうが、わかっているようで案外わからないのが自分の想念ボタン(習慣的想念)です。大体物事の経過は記録して比較検討しなければその進展ぶりを正確に知ることはできないものです。記録するということは必ずしも過去にとらわれることではなく、むしろ未来の前進のための土台になるのですから、精神のレベルアップを図ろうとする人にとつては不可欠の方法であると言えるでしょう。しかも記録して比較検討するのは科学的なやり方です。

ところで、いつまでも想念観察を続けるだけでは自分の想念ボタンを客観視する練習にはなってもそのボタンを変えてゆくことにはなりませんから、観察を続けながら宇宙的なフィーリングを高めるようにして低次な想念感情が起らないようにすることが大切です。そのためには万物を生かす宇宙の意識(または英知・パワー)を明確に意識して、自分がその宇宙の意識に生かされているということを強く思念し続けることが大切です。自分の心を宇宙の意識と一体化させる方法については、個人差があるために一定の方法だけをだれにも強制するわけにはいきませんので、一個人があみ出した方法を他の人がまねると危険を生じることがあります。だれにもや

れる未発表のすばらしい方法を後日お伝えしましょう。

### 宇宙の意識との一体化

宇宙の意識と一体化するという場合、重要なのは四つの感覚器官を意識と一体化させることなのであって、ただ漠然とした生命力のようなものを冥想することではありません。単なる冥想だと暗示作用となり、これではエネルギーが完全に発動しないどころかむしろそれを抑制することにもなります。意識そのものを冥想すると心霊的になりやすいのです。肉体内部に宿る意識とは自然の発電機みたいなものであってそれ自体が想像を絶したすさまじいエネルギー源ですから、それ以上手を加えて再充電する必要はないわけです。重要なのは意識の持つ普遍性—他を非難せずエゴの心も持たない性質—に四つの感覚器官を似させることにあります。これはちょうど私たちが両親の生き方をまねれば両親と一体化してくると同じで、四つの感覚器官を赤ん坊のように純一無雑な状態にして無条件に従わせることを意味します。そうすると内部の偉大なエネルギーが自然のままに発動します。なぜなら人間の意識は宇宙の意識のコピーであるからです。しかも人間の心（センスマインド）は体内に宿る意識のコピーですから、本質的には手におえない悪者なのではなく、宇宙の意識の孫みたいなもので、目覚めれば父や祖父のもとへ帰れるわけです。

意識というものは体験を経なければ発動が高揚し

ません。冥想だけに頼っていてもダメなのです。なぜなら意識とは記憶でもあるからで、体験を通してこそ記憶となるからです。この記憶は大体にホルモンのためる分泌腺が受け持っています。このホルモンのバランスがくずれると二重人格になったり狂気じみたりしてきます。少年の反抗期も分泌腺と関係がありますし、分泌腺が何かのショックを受けるといわゆる心霊現象を体験したりすることがあります。たとえばホルモンの記憶の貯蔵庫に死者の残留意識が吸収されるとヒョウイ霊がかかってきたような現象が発生しますが、これは実際には靈魂のヒョウイではなく、死者が残した意識の一部がホルモンによって活性化されるのです。また多くの病気はホルモンのバランスがくずれることに起因していますから精神と同様肉体の健康にも留意することが大切です。

### 神様になっちゃお

アダムスキーは三大哲学書の中で、人間のセンスマインドを宇宙の意識と一体化させることの重要性をいやというほど何度も説いています。その具体的な方法については詳細に述べていません。これは人間の発達に個人差があるため、或る一定の自己訓練法を万人に押しつけるわけにはゆかないのです。したがって書物を読むだけでものたりないと思われる方は自分に適した方法を工夫されるとよいでしょう。

アダムスキーが人間のセンスマインドを宇宙の意

識と一体化させよと言う意味は、言いかえれば「神になつてしまえ」というのと同じです。神という宗教めいてきますが、私たちがやっていることは宗教ではなく、人間のフィーリング（感覚）を高めることによって高次な波動を感知し、テレパシクな生活をすることによって精神的にリファイン（精化）された調和ある美しい環境を生み出そうというのですから、強制、礼拝、神秘化などは無縁です。この自己開発は本来個人的な性質を帯びたもので、グループ活動的なものではありません。

### テレパシーは魔術ではない

以上のように見ますと、アダムスキーの哲学は頭脳でひねり出した理論や観念の遊びではなく、自己訓練によって人間の感知力を高めようというのですから、哲学とはいってもいわゆる学問的な哲学とは異なって、もっとはるかに実際の、現実的です。この「感知力の向上」をアダムスキーほどに強調した先駆者は他にいないと思われませんが、そのためにテレパシーという言葉がアダムスキー哲学の代名詞のようになつてしまひ、しかも他人の心を読み取る魔術的な秘法のごとく考えられて、このような能力を開発しなければアダムスキー哲学をやったことにならないとか、いくらアダムスキー哲学をやつてもこんな能力が出てこなければ何にもならないと思われるがちですが、これは少々近視眼的な考えです。他人の心を読み取ってひそかにほくそえんでいるという悪

趣味的な術の体得がアダムスキー哲学の本領ではありません。むしろ万象の因果関係を感じて物事の確な判断ができるようになることを主眼としています。アダムスキーはそのような感知力または感受性の開発を力説したのですが、英語は語彙が貧弱なためにテレパシーという語以外に適当な語が見当らなかつたわけです。そこでアダムスキーの言うテレパシーという語の意味が日本ではいささか感違ひされることになったのですけれども、実際には他人とのつき合いにおいて相手の気持を敏感に察知して、感情を書きさないようにこまやかな心づかいをし、こまかいことによく気がついて万事抜かりのない世話や奉仕ができるようになれば、その人はすでにテレパシッ的な生活をしているのです。こうした常識豊かな高い感性を持ち合わせないで、またそのような感性開発の自己訓練を何も行なわないで、テレパシーがどうの宇宙哲学がどうのと難解な言葉を並べ立てて議論しているだけでは無意味ということになります。

もちろん他人の心が自在に読み取れるほどの超能力が開発できればこれにこしたことはありませんが、それはあくまでも他人に対する奉仕活動や自衛のための手段とするべきで、したがって真の能力者はエゴの拡張を好まないために大体に隠しているのが普通であると思われれます。

本格的なテレパシーの練習法はアダムスキー著の「テレパシー」(文久書林刊)に述べてありますか

ら、すでにご存知と思いますが、この練習には必ずしも人間同士でなくても身近な動植物(イヌ、ネコ、鉢植えの小さな草花等)を相手にしてもよく、無生物の手紙類なども練習材料になります。手紙が来たときにすぐ封を切らないで、内容をテレパシッ的な印象によって感知する練習をします。小さな植物に対しては「からだを曲げなさい」というような想念を発し続けてやりますと、そのうち植物の姿勢がこちらの命令どおりに変化したりします。

テレパシーを行なう際に、送信よりも受信の方が困難だと思われがちですが、送信もむづかしいのであって、特に熱烈な精神集中はよくありません。集中や緊張は利己的な現象で、この場合はカメラの絞りを小さくするようなもので、送信力が弱まります。むしろ送信の方がより大きなリラックスを必要とするのですが、これは湯上がりときのゆったりとした解放状態にたとえればよいでしょう。つまり自身を宇宙の意識に解放すれば、あとは宇宙の意識がやってくれるというわけです。地球人は求めすぎのためにテレパシーがうまくゆかないのだと言われています。とにかく送・受信のいずれにしても自分を宇宙の意識の中に投げ出してしまふことが大切です。

### コンタクトの条件

さてアダムスキー問題の研究者たちのあいだで当然のことながらスペース・ブラザーズ(他の惑星か

ら来た人)とのコンタクト(会見)が話題となり、自分もコンタクトしてみたいという欲求をだれしも起こしますが、事はそう簡単に運びません。自分はこの間にスペース・ブラザーズの存在を信じ、友好的な態度で接しようとし、熱心に歩きまわっているのに向にコンタクトが発生しない、何か変だ、アダムスキーの物語に根本的な疑惑が起こってきた、というような考えを起こす人があってもいいかもしれません。

たしかにブラザーズは地球人に対して万人に平等な態度をとり、友好的な気持で迎えようという人には援助の手をさしのべようとされるでしょうが、これはあくまでも基本線であって、円盤の存在を信ずる人のすべてにいきなり「おれは金星人だよ」と話しかけるようなことはされないうでしょう。なぜか?

それは地球人のほとんどがセンスマインドだけで生きていくために、そんなことをしたら双方に危険な状態が発生するからであって、それを未然に防止するには地球人の想念や精神の状態を調べて、人を選ぶ必要があるからです。これは決して不平等なのではなく、ブラザーズ側としてもやむを得ない処置であるようです。だれかがどんなに熱烈なコンタクトの願望を持っていても、本人が容易に秘密を洩らすような口の軽い人であつたり、名譽欲にかられていたり、(この名譽欲を起こすことは絶対にいけないようです)好奇心のトリコになったりしているだけでは、まずコンタクトは望めないでしょう。誠実な人であってもコンタクトしたばかりに家庭や周囲の

人々とのあいだにトラブルが発生しそうな場合はコンタクトは発生しません、これはブラザーズの本人に対する思いやりのためであるようです。

したがってコンタクトティー（コンタクトする人）になるには次の条件が考えられます。

1. 好奇心の段階を完全に越えてスペース・ブラザーズのプログラムに協力する気持になり、「奉仕的に働きますからどうぞ私をお使い下さい」という態度をとること。
2. 鉄のような強固な意志を持ち、絶対に洩らすなと言われたら口が裂けても洩らさないほどの誠実な信用のおける人間になること。
3. 常に自分の想念感情を観察して、利己的な想念を排し、高度な宇宙の想念を保つように努力すること。
4. コンタクトの目的を明確に樹立して、その実現のためにすさまじい忍耐力を発揮すること。
5. テレパシクな感受力を開発して、自分の内部からわき起こる印象に従って行動するように自己訓練を続けること。

右の内、特に5が重要です。というのはスペース・ブラザーズは地球人に何かを伝えるときには必ずフィジカル・コンタクト（人間同士の対面）によってその国の言葉を使用しながら口頭で伝えるのであって、心霊の方面で言われているようなテレパシーだけでメッセージを伝えることはしないために、テレパシーは会見の場所へ本人を呼び出すためにしか用いられず、したがってそのテレパシクな呼びかけをキャッチする感応力を持たねばならないからです。この呼びかけに手紙や電話などが用いられないのは危険防止のためであって、結局テレパシーによる合図が最も安全な方法なのです。この合図は予告なしに突然行なわれるのが普通で、それをキャッチした場合はまず心中に何とも言いようのない不安な感じがわき起こり、しきりにどこかの場所へ行きたくなくなってくるというような状態を呈するのであって、その点についてはアダムスキーも「空飛ぶ円盤同乗記」の最初のあたりで、ロサンジェルスのホテルにおけるコンタクトに関して詳細に述べていますから、一応ご存知と思います。これからみても自分の想念印象の観察がいかに重要であるかがわかるでしょう。誤った印象によって誤った場所へ行っても失望することなく忍耐強く続けることが大切だとアダムスキーも言っています。遠い天空の宇宙船内にいる宇宙人からテレパシーによって地球人類に対するメッセージが送信されたのを冥想中に感受したと称する人があります、これは幻覚かウソかのどちらかです。

以上のようにみますとコンタクトティーになるための条件は実にきびしいのであって、並大抵なことでは実現しないと言えます。それはそうでしょう。アダムスキーにしても円盤写真を撮るのに風雨や厳寒をものともせず数年間のすさまじい忍耐力により、ブラザーズ側の試験に耐え抜くことによって栄冠を授けられたのですから――。コンタクトを望む人は

まずこの態度を見習う必要があります。つまり真剣さと誠実さの権化にならないければためなので、単なる興味本位、漠然としたあこがれという程度では絶対にだめと言ってよいでしょう。

「自分は近いうちにブラザーズとコンタクトしそうな気がする」と言う人がこれまでに何人かいました、私はだままっているだけでした。返す言葉がないのです。第一、コンタクトはすさまじい忍耐力をテストされた結果発生するのであって、この試験を経ることなしに起こるはずはありません。ただし円盤・宇宙人問題をまったく知らない人が突然にコンタクトされて円盤内に案内されることもありませんが、このような事件は例外であって、そこらの詳細な理由はよくわかりません。

#### 生まれ変りについて

私がかつて出した書物「空飛ぶ円盤とアダムスキー」（高文社刊）の中に、デンマークで行なわれたアダムスキーの質疑応答中（八四ページ）、一個人の死と生まれかわりの期間が、答として「常に数秒間」となっているのは誤りで、これは「常に三秒」が正しいのだとか、妊娠した直後の婦人の子宮に靈魂が移行するのではなくて、出生直前の幼児の肉体に移行するのが正しいのだけれども、デンマークのハンス・ペテルセンがこの質疑応答に関してでたらめな情報をまきちらしたためにアダムスキーが講演会で答えたことが正確に伝えられなかったのだとい

うような情報を米國から日本向けに流した人があります。本人は真実を伝えたくつもりでしょうが、このことは結果的に日本GAP内にちょっとした混乱をひき起こしました。なぜなら世界GAPの内幕のみにくい主導権争いを暴露するのは家庭内の不和を近所へまきちらすようなもので、AとBのいざれが正しいにしても、しよせん第三者の疑惑と嘲笑を買っただけにすぎないからです。これは私にとってよい教訓になりました。一個人が真に深い知識や体験を有しているかどうかは本人の態度を見ればわかるというのは真実であると思います。過去十数年間、円盤研究家と称する人のなかに口では宇宙がどうだのと壮大な言葉を吐きながら常識のない態度によって人を悩ませて平然としている光景を幾多見聞しましたけれども（私もその一人だったかもしれませんが）、これはお互いに自重して、決して他人の感情を害さないように自己の言動に細心の注意を払い、人が集まる所ではなるべく調和した美しい雰囲気をかもし出すように心がけて、その上での円盤研究を行なうべきではないかと思うのです。

ちなみにその人が伝えた「常に三秒」は私に言わせれば誤りで、これは別方面から聞いたところによりますと「平均三秒」が正しいとのこと。つまり人間が死んでから平均三秒間に死者の靈魂が出生直前の幼児の体内に移行するわけですが、たまに例外として妊娠五、六カ月くらいかるときに移行することもあるそうで、また出生後にすでに移行した靈魂

が入れかわることもあるということで、アダムスキーはその一例だったと聞いています。また人間の死後には死体の形を保つために「意識」（靈魂ともいえるもの）が幾分残存していますから、早く全部の意識を移行させるには死後ただちに死体を焼いて灰にすることが必要です。土葬は最も好ましくないやり方です。進歩した惑星では死体を瞬時にして元素に還元させる方法が行なわれているようですが、地球も早くこの方法を用いるようになることが望ましいのです。

生まれ変りといえは、アダムスキーはもと金星から志願をして地球へ生まれ変わってきた人で、彼のその過去をブラザーズから知らされるまでは気づきませんでした。アダムスキーでさえそうですから、一般地球人のなかに「自分は×星から生まれ変わった人間なのだ」と言う人があれば、まずそれは本人の幻想かハッタリのいずれかとみてさしつかえありません。つまり生命の連続に関してはものすごく神秘的な不可解なものがありますので、正確なところはブラザーズから教えられない限りわからないと言つてよいでしょう。

人間の生まれ変りについては大体に十五、六回の機会が与えられているようで、それでもなお宇宙の意識に気づかなければ本人は完全に消滅するとのことで、これは流星にたとえられます。したがって永遠に生きようと思えばなるべく早くセンスマインドを宇宙の意識と一体化させる必要があるわけですが、

なお、人間は大体に男女の両方に半々ぐらいの割合で生まれ変わり、男に生まれたときは意志力を、女に生まれたときは忍耐力を養う目的をもっています。また、動物は原則として同じ動物に生まれ変わるけれども、例外としてときたま人間の体内に移行する例もあり、その場合はたいへん奇形になるといふことです。

生まれ変りという問題は実に深遠な意味を含んでおり、生命の連続（スペース・ブラザーズはこのように表現しているようです）にはブラザーズにも不可解な面があるようです。このスケールの大きな問題に関心を持つことは持たないよりもはるかによいことですが、地球人はこのためにとかくカルマ（宿業）にとらわれがちです。これはいけないことで、私たちはいかなる瞬間でも宇宙の意識に気づいてそれと一体化したとたんにカルマを断ち切ることができのですから、結局重要なのは常に「現在の一瞬」なのであって、過去とは直接の関係はありません。したがってカルマにとらわれるといつまでも自縛の状態になって苦しむことになりません。人間には常に未来への前進があるのみですから、過去に対する執着を捨てるのが大切です。

人間は自分自身の内部からわき起こる印象に従って行動しなければならぬ

アダムスキーの偉大なティーチングズにおいてもしばしば述べられています。人間は自分の内部からわき起こる印象に従って行動することが何よりも



大切だと私はきびしく聞かされています。一般人ももちろん無意識的に自分の印象に従って行動しているわけですが、想念内容を分析することをしないために、低次な誤った印象に従うことによって失敗をくり返しているわけです。ここにおいて想念観察の重要さをいかに重視してもしすぎることはないということができます。だれかが自分を痛めつけようとする場合も、相手は自分自身の印象に従ってそのような言動をなすのですから、本質的にはそれを非難することはできないのです。しかしあまりにこちらを攻撃しておとしいれようとする人がある場合には、その難を避ける方法がありますから、次にそれを述べましょう。

### 忘れる技術

悪質な人がこちらをやっつけようとして策動する場合、相手の姿を思い浮かべて「あの人はほんとうは善人なのだ」と思念するのがよいと普通言われていますが、これは一般地球人の段階としては依然としてこちらと相手のあいだに心のケープルを作ることになり、くされ縁が断ち切れないことがあります。こんな場合は「相手のことを忘れること」が秘訣であって、忘れてしまえばケープルが切断されますから、そうなると思議に相手が手をひっこめるのです。アダムスキーはこの術に長じていたと言われています。だからこそあれほどに攻撃を受けながら危難をのがれることができたわけです。一口に忘れる

といっても容易ではありませんが、その場合は自分の意識を宇宙の意識に乗せてしまつて、あとはそれにおまかせするという気持を起こしますと容易に忘れることができます。

### 奉仕には段階はない

人間の奉仕活動には段階はありません。ただ道路を歩くだけでもそれは何らかの意義を有する奉仕的行為なのですから、自分の日常の仕事・職業・他人に対する行為等すべて何をやっても奉仕だという自覚のもとに行なえば、一様に等しい価値をもつものとして宇宙のどこかに記録されるはずでです。しかし、どんなにすぐれたことをやっても他人に認められて賞賛されたいという欲望を起こせば、その価値は相殺されてしまいますから、名譽欲は絶対に禁物です。第一、センスマインドだけで生きている地球人に認められたところで仕様がありませんか。真に認めてくれるのは創造主だけと言ってよいでしょう。

### スペース・プログラム

アダムスキーが伝えたスペース・ブラザーズのスペース・プログラム（地球救済計画）はまことに壮大かつ深遠なもので、すでに数千年来続けられており、私たちが知ったのはそのなかのほんの一部分にすぎません。そこで群盲象をなでてるいの混乱が世界の円盤研究界に生じたわけですが、これはもちろん

ん地球人側の理解力の結果であつて、ブラザーズ側に責任はありません。しかしプログラムは整然と遂行されているようですから、いつか万人がこれに気づいて歓喜をもってブラザーズを歓迎するようになる日が来るでしょう。

アダムスキー問題はそのためテスト・ケースになつたようで、その結果ブラザーズ側は地球人の実態に關してかなりの知識を得たようです。今後はアダムスキーのような公然たるコンタクトは出ないかも知れませんが、コンタクトは依然として世界各地でひそかに行なわれているようで、ブラザーズの援助を望む人には惜しみなく愛の手がさしのべられますから、コンタクトになるための条件はきびしいものの、決して失望しないで忍耐強くブラザーズに親近感を持ち続けることです。というよりもむしろブラザーズを心から歓迎するという態度が必要だと言えるでしょう。もちろんブラザーズやシスターズというのは地球の同胞たちをも意味しますから、これを抜きにして天空ばかり見つめているのは片手落ちです。

宇宙の広大さと深遠さ、人生の不可思議さ、人間が創造主の御子として創り出されたすばらしさを思うとき、自分が生かされていることに対して爆発的な歓喜の情が全身にみぎるのを感じるようになります。一つの肉体でなく、宇宙の奉仕体としての自分を自覚できるようになれば、すばらしいことになるでしょう。

改訳

## 空飛ぶ円盤同乗記<sup>(3)</sup>

ジョージ・アダムスキー

久保田八郎訳

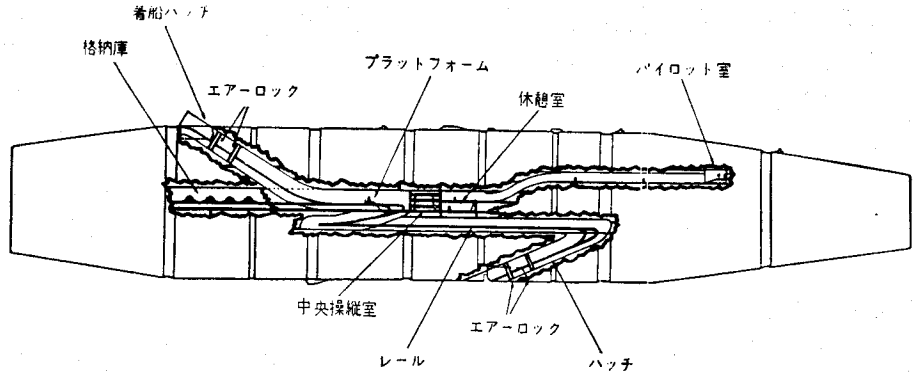
### ●金星の母船 第3章

私たちの小型機（円盤）は母船の頂上をめざして滑降して行ったが、それは地球の飛行機が航空母艦のデッキへ着艦しようとして帰って行く有様と非常によく似ていた。注視すると、クジラの大あくびを連想させるような円型のハッチが見えてきた。この母船の図解を見た人は（次ページ）の図解を参照）下方へ少し傾斜した不格好な鼻が上部につき出ているのに気づかれるだろう。このハッチは円筒型胴体のずっと端の方にあつて、そのすぐ後ろに鼻が傾斜していることがわかった。ここへ着いた小型機はハッチの中へ進入して、下方へ傾きながらこの大母船の内部へ進行を続けたが、ここで初めて私は穴の底へ落ち込むような感じがした。思うにこれは小型機がすでに自身の力を利用しないで母船の引力に引っぱられていたからだろう。

円盤のフランジ（ふち）を二本のレールにのせてゆっくりと定めらかにすべりながら、われわれはゆるやかな下り傾斜を降りて行ったが、降下速度は摩擦とフランジ内の磁気とによってコントロールされていた。オーソンがこれを完全に制御していたことがわかった。というのは、一度私からだのバランスを失いかけたとき、瞬間彼は機を止めて私が立ちなおるまで待ってくれたからだ。ふたたびゆるやかなスムーズな滑降が続いて、やがて私たちは船体の上端と下端の中間と思われる位置に到着し、ここで機は停止してただちにドアが開いた。

長さ約四メートル半、幅一メートル八十センチのプラットフォームの

## <図2>金星の母船の断面図



上に一人の男が立っているのが見えた。手には金属製のクランプ（とめ金）のような物を持っていて、それが架線にくっついている。背はさほど高くなく——メートル六十センチあまりだろう——、しかも私が今までに会った宇宙人のだれよりも皮膚の色の黒い人である。砂漠で最初にオーソンと会ったときに彼が着ていた服と色もスタイルも同じような茶色の宇宙服を着ており、黒のベレー型の帽子の下から黒い髪がのぞいていた。

円盤から降りたファーンコンのあとを私が続き、次にラミューが出て来て、最後にオーソンが出た。一同がプラットフォームから離れるにつれてベレー帽の男が微笑して一人一人にうなずいてみせたが、言葉は交さなかった。

このプラットフォームから十二段ほどの階段が母船のデッキ（複数）の一つに垂れ下がっているのだが、それを降りながら私は円盤を見つめる余裕があった。それはわれわれがすべて来たレールの分岐点のすぐ手前で停止している。二本のレールが船内のにびて下方へ曲がりながら視界から消えている。レール間は暗いために下に何ががあるのか見えない。別な一組のレールが円盤のそばの分岐点からまっすぐに続いて船尾の大ハンガーすなわち格納デッキの方へのびており、そのデッキにはレール上に数台の同型円盤がならんでいた。「これは惑星間を航行中に小型機を収容しておく格納庫です」とそばにいたファーンコンが階段の途中でちよっと立ち止まって説明した。「もしこれから別な惑星へ行くとするれば、私たちが使用した円盤はみんなが降りるあいだだけプラットフォームに停止して、そのあとは分岐点を通してこの格納庫へ送られます。しかしあとで私たちは地球へ引き返しますので、このプラットフォームで円盤に再充電する必要があります」

私はうしろをふり向いた。するとプラットフォームの男は架線に付属しているクランプをすでに円盤のフランジの方へすべらせて、フランジとその下のレールの両方に接触させていた。

この再充電の操作がどのようにして行なわれるのかはわからないが、私にはこのクランプが地球の機械技術者の使用する大型クランプによく似ているように思われた。またその架線の他の端がどこに連結してあるのかもよくわからない。クランプとレールを接触させるのはたぶん回路を完全にするために必要なのだろう。それとも円盤のふちの下の目に見えない連結部へ直接はめ込んだのかもしれない。だが遅くなるといけないので質問はしなかった。

止中の疑問に応じたわけでもあるまいが、ファーンコンがすすんで説明を始めた。

「この小型機は自力で大馬力を発生することはできません。母船から比較的短距離の飛行をするだけで、そのあと再充電するためにまた帰って来るのです。いわば母船とコンタクト地点または観察地点間の往復機として使用され、いつも母船のパワープラント（動力発生機）からの十分な再充電に頼っています」

階段を降りた所でわれわれは大操縦室へはいった。室内は長方形で四隅が丸く、大きさはざっと十・五メートルに十三・五メートル、高さは十二メートルばかりというところだろう。二つのドア以外は壁全体が円盤の内部と同様に色のついたグラフやチャートなどで覆われているが、ここにあるのはもっとスケールが大きくて数も多い。

室の四面の壁にそって三段のひな段式になった壇があり、そこから多くの機械装置をながめたり調べたりできるようになっている。最上段には主望遠鏡があり、最下段にも別な望遠鏡がすえてある。この二台の望

遠鏡は船内各所の多くの機械装置と電子工学的に連結しており、多くの位置からこの二台を使用できるとのことだった。

またここには或る自動装置があるのだが、くわしく述べることは禁じられた。私はこの自動装置の小型のものを円盤内でも見ている。その他この操縦室には数個の機械があつたけれども、私が見た限りではそのどれにも動いている部分はない。この室にとどまって、グラフ、チャート、色、機械装置類のすべてを見学し、その働きなどについて質問が許されればよいと思つたが、その特権は与えられなかった。そのかわりにわれわれはこの操縦室を出て二番目のドアを通り、隣りの休憩室へ案内された。こんな美しい部屋を見るのは初めてである。入口に立った瞬間、その簡潔さと華麗さに息の止まる思いであつた。調度品の華美なのに驚嘆したばかりでなく、室内にただようすばらしく調和した雰囲気には私は立ちすくんだのである。

この思いがけない体験からわれに返るのにどれほどの時間がすぎたかわからないが、やがて私は興味深くあたりを見まわして細部を観察し始めた。

私の判断では、天井の高さは約四・五メートル、床は十二メートル四方の広さである。やわらかい神秘的な青白い光が満ちているが、照明器具は見あたらない。しかも明るさは平均しているのだ。

続いて戸口からこの豪華な室内へ足を踏み入れたとき、信じられないほどに美しい婦人が二人いるのに気づいてたちまち目をうばわれた。二人は長イスから立ち上がってこちらへやって来る。

これはたしかに一大驚異である。というのは或る理由によって宇宙旅行者のなかに婦人がいようとは夢にも思わなかつたからだ。二人の出現そのもの、驚くべき美しさ、挨拶するために接近しながらはっきりと示

すあたたかい態度などは、別な惑星から来た宇宙船の壮麗な室内を背景としてまったく圧倒的であった。

二人のうち小柄な婦人が挨拶がわりに私の手に触れてから、むこうへ歩いて行く。すると背の高い年下と思われる婦人が身をかがめて唇で私の頬にそっと触れた。最初の美しい婦人が無色の液体のはいった小さなグラスを手にして引き返し、それを私にさし出した。

この人たちの厚い友情に深く感動した私は、相手に感謝してグラスを受けとった。その水は（明らかに水であることがわかった）地球の清純な泉の水のような味である。しかしもっと濃くて、きわめて薄い油に似て少々粘り気があるように思われた。それをすすりながら私は極力静さをとりもどそうと努力し、この絶世の美女たちのイメージを脳裏にしっかりと刻み込もうとした。

水を持ってきてくれた女性は身長約一・五七メートルで、皮膚はたいそう美しく、よく均整のとれた両肩の真下まで金髪が波を打って垂れている。目はもっと金色を帯びており、やさしく楽しそうな表情をたたえている。相手は私の心をすべて読みとっているのではないかという気がした。すきとおるような皮膚には少しのキズもなく、絶妙な優美さをたたえ、しかもひきしまつてあたたかく輝いている。顔もみごとにととのっていて、耳は小さく、真白い歯が美しくそろっている。年令はずいぶん若く見えた。二十才をさほど越えてはいないらしい。長い先細の指のついた両手はすらりとしている。二人とも顔や指の爪などに全然化粧をしていないことに気づいた。それでいて二人の唇は自然のままの真紅色を呈している。兩人ともいかなる宝石類も着けてはいない。たしかにこんな装飾品は本人たちの自然の美しさをそこなうだけだろう。

二人とも足首まで垂れた、ベールのような織物のゆつたりとした衣装

を着けており、それぞれ色の違うすばらしいベルトを腰にしめているが、そのベルトには宝石がはめこまれているように思われた。

小柄な金髪婦人の服はすっきりした薄青色で、小さなサンダルは金色だった。後になって彼女はわれわれが金星という名で知っている惑星の住人であることを知ったが、この名前を一応カルナと呼ぶことにしよう。

他の一人に私がつけた名はイルムスというのだが、これは背が高く、髪も目も黒色である。彼女も髪を肩の真下まで滝のように垂らしているが、それは赤茶色の光を帯びた美しいうねるような黒色であった。その大きな目も黒く輝いて茶色の光を放っている。カルナと同様に楽しそうな表情をあらわしているの、やはり私の心中の想念を読みとることができるのだなと思った。実際、このことは（テレパシーの能力を持つらしいことは）私が今までに会ったどの宇宙人からも等しく受けた印象である。この美女が着ている服の色は豊かな緑色で、サンダルは銅色であった。ファーコンと同じくイルムスも火星人である。

地球以外の別な惑星から来たこの婦人たちに関する描写はこれ以上不可能である。この不徹底な文章によっておそらく読者は完成された美のイメージの追求にみずから想像をたくましくしながら、ついにはその現実性の不足を必ず認められるにちがいない。

小さなゴブレット（台つきコップ）の水を飲みほすと、すわるようにすすめられたので、私は喜んでその言葉に従った。

私はいったドアの真反対の壁に一枚の肖像画がかけてあったが、それはたしかに「神」を描いたものであった。この肖像が放つ燦然たる輝きにつつまれたとき、それまで夢中になっていた若い婦人の美しさを一瞬忘れてしまった。それは十八才ないし二十五才ぐらいの一人の「神」の頭部と両肩をあらわしていて、顔は男性と女性の完全な融和が具体化

されており、目は名状しがたい英知とあわれみをたたえていた。

時間の経過もわからぬほどにしほしこの美しさに恍惚となっていたが、その間婦人たちは一言も発することなく、やがて私はふと周囲の状況に気づいてわれに返ったのである。

この神がだれであるかを尋ねる必要はなかった。カルナが沈黙を破って説明したからである。

「あれは私たちの『無限の生命』の象徴です。私たちの家庭ばかりでなく、どの宇宙船にも飾ってあります。私たちが年をとらないように見えるのは、いつもこの肖像を見ているからです」

部屋の片側には多くのイスに囲まれた大テーブルが一台あった。これは乗員の食事、会議などに使用されるのだという印象を受けた。これからみると、今は数人しかいないが総人員は三ケタの数に達するらしい。この印象は確証を得たわけではないが、テーブルの用途についての想像はファーンコンが正しいことを認めた。また室内の大部分は航行中の非番の乗員が休憩室に使用することも知った。方々にデザインやサイズの異なるクッションつき長イス、二、三人用の背つき長イス、一人用のイスなどがちらばっている様子は地球のそれとよく似ているが、どれを見ても地球のものより低く、すわり心地がよさそうで、デザインや外観ももっと優雅である。それらは金欄のようなふわふわした柔らかいケバのある布で覆われている。色はさまざまだが、その豊かなあたたかい落ち着いた色を見るのはこの上なく魅惑的であった。

イス類のそばには、中心部に興味ある裝飾がほどこされた低いテーブル類があり、表面はガラスまたは水晶でできている。しかし灰皿らしい物は全然見あたらない。この人たちはニコチンの習慣にふけられないのだなと直感的に悟った私は、タバコをポケットから出さなかった。だが一

度はかり手くせで取り出したら、これを見た金星の婦人が微笑して言った。「お好きなら吸ってもかまいません。灰を受ける物を持って来ましょう。だけどこんな奇妙な習慣にふけているのは地球人だけですよ！」彼女に感謝して私は一本も引き抜かずタバコの箱をポケットに入れた。

説明を続けよう。——床には壁ぎわまで一杯に豪華な敷物がしいてあるのだが、それは深くて柔らかい、ケバのある薄茶色の無地の敷物で、歩行に快適である。

長イスにすわるようにすすめられたとき、私の両側にはファーンコンとラミューがすわった。談話に適当なまむかいの位置には、同じ型で同じ大きさの長イスがあつて、そこには二人の婦人がオーソンをあいだにして着席した。

私はからっぽになった水のグラスをまだ手にしていたので、それを目の前の低いテーブル上においた。

このグラスの材料が私の目を引いた。水晶のように澄んでいて、何の彫刻もほどこしてはない。地球のガラスやプラスチックのような感じもない。どんな材料で作られたのか見当もつかないが、破損しない性質のものだという明確な印象を受けた。

調度品類の最も著しい特徴をよく見てから、次に壁を見まわした。すると右手に、少し開いた大きな美しいドアーがあるのが目についた。どう見てもツマミやロックはない。これは倉庫へはいるためのドアーだとカルナが説明したあと、更につけ加えた。

「この宇宙船は宇宙を旅行したり調査したりしているあいだは故郷の惑へ長く帰りませんし、またその間必ずしも別な惑星に降りるとは限りません。したがって食糧や必需品などの大きな貯蔵設備が必要なのです。

あの反対側に見えるドアは——いまの倉庫のドアに似ていますが、調理室に続いています」

このドアは食事の目的に使用されると見当をつけた部屋に——ついでいる。

右手の壁のドア——近くに大きな絵がかかっているのを私は興味深く見つけた。都市を描いたものだが、ちょっと見たところでは地球の都市とほとんど変わらないように見える。違うのは地球の市街地が通常はきちんとした碁盤目の連続であるのに、これは円形に計画されていることである。しかし建築様式はまるきり違っていた。それをどのように説明してよいかわからない。地球の建築物のスタイルに類似した建物は一つもないからだ。そこには地球の多数の優秀な建築家が努力しながらもまだ全然達成していない完成された優雅な軽快さと優美さがあった。地球人が夢想する都市ではあるが、地球では決して見られないものである。ここに描かれた都市はこの宇宙船のホーム惑星である金星の都市ではないかと思つたが、後に聞いたところによるとやはりそうだった。

そのドアの他の側にもう一枚の絵があった。農場の中を小川が流れ、背景に丘や山々のある田園風景である。農家もやはり円形に配置してあるが、もしこれが散在していれば地球の景色だと感違いして見すごしたかもしれない。話によればこの円形配置法は農業グループが小さな自給自足社会を形成するのにきわめて有利なのだそうで、ここには田舎の人たちになくてはならない品物のすべてを供給するのに必要なあらゆる物をそなえているのである。金星では日用品の割当て、その他あらゆる点で完全に平等なのだ。だから都市への旅行はレクリエーションか個人的な理由のために行なわれるだけである。

今度は長いテーブルをへだてた真向いの壁にかけてある大母船の絵が

目についた。私が乗っているこの母船を描いたものだろうかと考えてみた。この思いが心に浮かんだとき、金星の小柄な婦人が訂正して言った。「ちがいます。私たちの母船はあれにくらべると非常に小さいのです。あそこに見えるのは母船というよりも宇宙旅行都市とでも言う方がよいでしょう。本船は全長が六百メートルにすぎませんが、あの長さは数マイルもあるのですから——」

読者がこんな容積を信じそうにないことはわかっているし、私自身もこんな空想的な物を全然予期しなかったことはもちろんである。しかしここで心にとどめねばならないのは、機械力に頼るかわりにひとたびわれわれが偉大な自然のエネルギーを動力に利用することを知ったならば、地上に建設するのと同じほど容易に巨大な宇宙船内に都市を建設できるということだ。ロンドンやロサンゼルスは未熟な機械力と人力で大規模に築かれた幅四十マイル近くもある都市である——本来はたいした業績なのだが——。しかし一度引力の問題が征服されたならば、私たちの宇宙都市も実現可能となるだろう。

カルナが説明した。「このような宇宙船はたくさん建造されています。金星ばかりでなく火星、土星、その他多くの惑星で造られているのです。しかしこれらは一つの惑星が独占的に使用するのはなく、宇宙の全同胞愛のもとにあらゆる住民の教育や遊びに使用する目的を持っているのです。人間はもともと偉大な探険者です。したがって惑星間の旅行は少数の人の特権ではなく万人の権利です。三カ月ごとに各惑星の住民の四分の一がこれらの大船団に乗り込んで宇宙旅行に出発し、途中で他の惑星に着陸しますが、これは地球の客船が外国の港へ寄るようなものです。こうして私たちは大宇宙を学び、地球のバイブルに述べてあるように、「父」の家のなかの「多くの館」をもっと多く直接に見ることができ

のです。

各惑星にある知識の殿堂には多くの機械設備があつて、それによつて他の惑星の状態、太陽系、宇宙自体を研究することもできます。しかしあなたがたと同じように私たちにとても実際の体験以上にすぐれたものはありません。それであそこに描かれている母船のような大母船団を建造しているのですが、これらは文字どおり小型人工惑星といつてもよいでしょう。船内には三カ月間にわたつて数千の人々の生活と楽しみに必要な一切の物がたくわえてあります。大きさは別として、惑星と母船の主な相違点は、惑星は形が球体で神の力で創造され、中心の太陽の周囲を長円形の軌道をえがいて運行しますが、これらの小さな人工の惑星（母船）は円筒形で、意のままに宇宙空間を進行できるといふことです」

私に伝えられたこの言葉をよく考えているうちに、星をちりばめた天空の概念が心の中で次第に大きく展開してきた。カルナの言う「他の惑星（複数）」とは何を意味するのだろうか。

心中の疑問に答えてオーソンが口を開いた。「私たちの宇宙船団は、この太陽系の惑星全部ばかりではなく、近くの太陽系（複数）の惑星にも行きます。しかし宇宙にはまだ私たちの到達していない無数の太陽系に無数の惑星があるのです」

ここでまた疑念が起つてきた。彼らは今までに訪問した「他の惑星（複数）」で何を発見したのかと心の中で質問してみた。

私の心を読みとつた金星人の目がきらめいて、口もとにちらりと微笑を浮かべた。彼は休みなしに話を続けた。「地球の住民だけは別ですが、私たちは他の惑星の人々が非常に友好的であることを発見しています。その人たちも楽しみや教育用に巨大な宇宙船を持っています。私たちが彼らの惑星を報問して歓迎されるのと同様に、彼らも友人として私たち

の惑星へやってくるのです。これらの宇宙船が絶対に接近しないのは地球だけです。地球人が自分の小さな枠を超えた宇宙ばかりでなく、友情についてもより大きな理解力を持つようになるまでは着陸を禁じられているのです。宇宙旅行中は研究についてやす一定の時間以外にも多くの余暇があります。互いに他の惑星に到着すると楽しい集會が催されます。簡単に言いますと」と言つてここで彼はたいそうはつきりと次のように述べた。「他の惑星群の人々は互いに未知なのではなく、万人が友なのであり、どこへ行つても歓迎されるのです。私たちは宇宙に充滿する惑星を生命の海に存在するものと考えています。私たちがまだ行っていないるか遠くにある惑星も、宇宙船がもっと改良されたら行けるでしょう。私たちの宇宙船で航行しても到達するのに二、三年もかかる惑星が太陽系外にあります。それからみると、この太陽系内の惑星間の距離はせいぜい数時間から数日にすぎません」

地球人の距離の概念を思い出して私は叫んだ。「まったく驚異的ではありませんか！ そんな短時間でそれほど広大な距離を航行できるのは、いったいどうしてそんなに速く飛べるのですか？」

「私たちのスピードという意味は地球のそれとは全然ちがいます。宇宙船が発射しますと、そのスピードは宇宙の活動と等しくなるのです！

飛行機のように人工的に推進されないので、宇宙船は「宇宙の流れに乗るのです」彼ら金星人やその他の惑星人さえも、かつての宇宙征服の初期には現代の地球人を悩ましていたのと同じ問題に直面したことがあったと卒直に述べてくれたとき、私は地球の発達の可能性にはのかな希望を持つことができた。宇宙旅行への基本原理として引力を征服しなければだめだと彼らは再度強調するのであった。



# 声

六月四日の例会は素晴らしいものでした。毎回色々と啓発され、まるで一カ月分のエネルギーを与えられる貴重な場であるかのようにです。しかし今の私はそのエネルギーを永続させて使うことも出来ずにあります。多くの時間を「個人的なニゴの自己実現」のために過ごしているのですから。

ところで、実は昨夜「神と墓の古代史」を読んでいたところ、スワステイカについて興味をもたれる記事がありました。ハイリッヒ・シュリーマンのトロイ発掘当時の日記の写真がそれなのですが、ツボのスケッチのいくつかがスワステイカの中で一つそのものずばり「金星人のメッセージ」「マルセル・オム教授のそれ」が見出されるのです。

新大陸のことは別として、古代のトロイの人々がスワステイカを装飾の主題にしていたであろうこともおもしろいのですが、シュリーマンのスケッチの正確さを信じたうえで、圜の四つと圜の二つが左回りであり、**祀**の一つと最も注目される**祀**が右回りの正統派であることは、とても興味のあることです。

記事によりまずと、当時シュリーマン自身このマンジにもっと心をひかれたらしいのですが、彼がマンジに対してどんな考え方をされていたのか知るすべのないのが残念でもあります。

話はかわりますが、例会のあった次の晩

夜空に一風変わった不思議な光を見ました。本来なら今お知らせして久保田先生にご教示を願うべきなのですが、もしも何でもない現象でしたら申し訳ありません。ある種のサーチライトや何かの実験によったものか、いつもあるいは時々見えるものなのかどうか、もししばらく様子を見たらうえてご連絡したいと思います。(東京 三浦 修)

春暖の候、久保田先生も大変お元氣にお仕事にお励みの事と思います。GAPニューズレター四十八号と四十九号拝見いたしました。四十八号は私が日本GAPに入会しての初めてのニューズレターです。私にとってこの第一歩は永遠に記憶に残る事でしょう。

四十八号のフレッド・ステックリング氏の質疑応答、人間の魂。意識は肉体の下部に位置している事や、「私の想念観察法」や四十九号のオーラの見えるX氏の記事や特にアリス・ポモロイ女史の「アダムスキーの思い出」等を興味深く読ませていただきました。

私も生命の科学。宇宙哲学等を三回ほど読みかえし、私なりに想念観察法を実行しておりますが、大変難解で苦しんでいます。私は仕事から(カーペンター)自己の想念を手帳に記入する事は不可能です。だから私はわき起こる想念をかたっぱしから宇宙の想念に置き換えています。時には他人のもたらす非宇宙の想念で自己の非宇宙の想念を引き起こすこともあります。これは大変忍耐のいることであり、未熟で愚かな私の永遠の試練となる事でしょう。でも

最近では気味の悪いコン虫類にも愛情が持てるようになりました。それでも私の想念観察法には誤りがあるかもしれませんが私もできるだけ想念観察手帳に記入してゆきたいと思っています。また魂・意識の問題につきましても質問なり自分の考えなりがありますけれども、後程手紙に記したいと思っています。

一つ私に提案がありますから述べておきたいと思っています。我々はこの混乱した世界を救う目的として他人に対する愛と尊敬と同情と信頼感等との宇宙的意識の開発運動として指導者たちにその望みをかける事が大変困難であることはア氏の述べるところであります。そこで日本GAPとして目を転じて罪をおかした人を持った不幸な家庭の人々や病の人やその家庭や理解されると思われる人々にGAP会員の一人一人がハガキなり手紙なりで愛と励ましの集中攻撃をかけては如何でしょうか。これは犯罪者を憎まず裁かないという愛と尊敬と信頼という想念発想であり、人々への進歩を願うことは私たちの真の進歩・向上に役立つと思います。この際注意せねばならない事は

1. GAP会員であると明記すること。しかしGAPに入会させようとは絶対しないこと。
2. アダムスキー哲学を信じ込ませようとは絶対しないで、その人の自覚を待つこと。(ア氏を教えてやるのはよいが、あまりア氏に触れない方がよいと思う)
3. その人たちに絶対に不和や非難の想念を発しないで、尊敬と信頼の念を送ること。

この運動を日本で起こし、世界的運動としては如何でしょう。(福岡県 内田格男)

一人間の魂が肉体の下部にあるというステックリングの説は個人的な仮説にすぎないようです。悩める人々を励ますのは大変すばらしいことです。その際はGAP会員ということも明記しない方がよいでしょう。 — 編者

最近号の「オーラの見える人」というのはよかったです。ほんものでしょう。エドガー・ケシー氏の言っていることと一致する点が多い。白銀色が最高ということ、治療に関係するのは緑色、死期の近い人がオーラを発していないことなど。特筆すべきは写真を見てわかるということ。円盤写真の真偽をこの方法ですればいともたやすい。(自分でできるといのですが)またコンタクトが偽物か本物かということなどを見わけのに最適です。フルコス氏に円盤の写真を送って写真の真偽およびコンタクトの真偽を調べてもらうのもよいと思いましたが(氏は手に触れるとわかる)貴方の身近にあのような立派な人がおられるのですから日本GAPの発展に間違いは起きないでしょう。

今回でフレッド・ステックリング氏の連載は終了したとことですが、二、三回目的時これはと驚いたものです。彼が宇宙船に乗っていたかどうかは知りませんが、例えばしていたとしてもまだ発表する段階ではないのか。いずれにせよ彼の言には大いに耳を傾けるべき多くの物があります。

アダムスキー氏を継いだのはヘニー氏と書いていたのですが、例の太陽の変化の科学調

査結果の結論は出ていないのでしようか。つまりわれわれの太陽系全体の状態がどのくらいのところにあるのかということ(崩壊期に近づきつつあるかどうか)。

世の中あいかわらずやかましいですが頑張って下さい。(名古屋 志水好夫)

—先号にのせた「オーラの見える人」という記事を編者のでっちあげ記事だといって騒いだ人がありますが、あれは真実をありのまま書いた記事です。編者の見るところではあのオーラの見える人はビーター・フルコスに匹敵するかまたはそれ以上の能力者であると思われます。ステックリングの説のなかには若干の個人的仮説があるようですが、大体にコンタクトテイでなければわからないような真実を伝えていきます。しかし彼は後にGAPの戦列を離れてしまいい現在は消息不明です。

—編者  
私、ニューズレターを購読させていただいてる者です。ともするとひるみがちな弱意志の私を、ニューズレターは毎回力強く励ましてくれます。

久保田先生のおかげでアダムスキー氏を知るようになり、もう一年半もの月日が流れてしまいました。現在まだセンスマインドを多少抑制できるようになったにすぎません。しかし初めてア氏の哲学を知った頃は正にニヒリズムのどん底ともいえるべき状態にいた私ですので、今の状態でも私にとっては非常な進歩と思っています。途中五

カ月ほどア氏の教えから離れたこともありましたが、現在はア氏の教えこそ進歩のた

めの最短期コースと確信するに至りました。最近ようやく、まだまだ波はあるのですが、平凡な生活の内に安らぎを見出せるようになってきました。ア氏を紹介して下さい先生に深く感謝いたします。どうぞこれからも頑張ってください。(定利市 村山祐一)

初めてお便りします。たびたびGAPニューズレターをお送り頂きまして深く感謝致しています。私は未熟者で知識も持っていませんが、お送り頂いたGAPニューズレターを読ませて頂いて少しずつ勉強させてもらっています。

アダムスキー哲学の偉大さには深く考えさせられています。そして、より一層アダムスキー哲学を学びたく思っています。久保田先生はいつもお忙しいから、くれぐれも御健康にはお気を付けて下さいませ。乱文乱筆どうかお許し下さい。

(宇和島市 清家弘子)

ニューズレター四十九号をありがとうございます。読みました。喜びで手が震えています。読み終った後の私はすでに今までの私ではありません。心が大きく開け、生命の永遠さ、真理についてより確かに認識できました。宇宙内のすべての人間がこの幸福を感じることであればと思いますし、私もこのことで役立つべく生きようと思います。宇宙の意識よ、あなたに感謝致します。

(岩国市 藤原孝幸)

その後御健勝のこと存じます。私の以前に接した人の話ですが、興味があったら

お読み下さい。以前に私が同じ職場につとめ、すばらしい人と言った人のことです。運送業なので肉体労働のため気が荒く、ケンカなどが度々あったのですが、ある時、その人がケンカの場合に居合せたので、私は手のつけ様もなく彼の動きを見ていたのですが、両方が青い顔をして口論し、一区切

した所で彼がケンカしていた人にニコリほほんだのですが、とたんにあたりがなごやかな空気になってケンカするのがおかしい位になりました。彼の前に出ると鏡の前に立った様に自分の心がハッキリとうつし出される様に感じるので、度々はすかし

私ですばらしい人々についてちょっとふしぎに思ったことは、それらの人々がアクトをするのを見たことがないということ。彼の近くによって感じたことは、若い、細い、決して強そうな人でないのに、どんなことに対しても積極的のぞむファイトというか、積極性、にげごしを知らない、そういう雰囲気を感じました。

ある時、彼の運転する貨物車の荷台にのったのですが、その時の人と車の一体感というか、すばらしいものを感じ、この人の車でならば死んでもかまわぬと思ったのですが、その後再びのせてもらった時、私の想念をよからぬ事と注意されてか、とても乱暴な運転をしたのをおぼえています。

彼は低い人には低くおどして、高い人にはより高く引上げるように接していた様ですが、ある時私は彼のあまりの無我の心に感激してかげなが手を合せたことがありました。私のその想念を察して彼は私の目の

とどく所に来て、人には見えない様にしてすわらないタバコをふかし、ガムをクチャクチャしてチンピラまがいの姿を見せ、自分は絶対者でないことを教えてくれたことがあります。

その後彼が転動になって離れ、掃除婦として入って来られた女の人が、私が会いたいと思った時はいつもすぐ姿を現共「一歩をふみ出せ」と、いつもここまでおいでをしてくれたのですが、私はついに強く一歩をふみ出すことが出来ずに退社しました。これがすばらしい人々に接した思い出の一端です。(大阪府 堀本宣昭)

現在の戦争や公害、自然破壊等の問題は一国だけで解決できるものではなく、全世界が地球的な見地で解決しなければならぬ問題だと多くの人々が語っています。私もアダムスキーの勉強をしてから多くの人々が幸福になれるように努力するにはどうしたらよいかと考えていました。そして国連「地球市民」登録をすることによって、

国連が地球の問題を解決できる力を持つこととがいかに大事かということがわかりました。多くの人々がこれに登録するように呼びかけることが地球を平和にする一つの助けになることもわかってきました。日本GAPのみならず、世界連邦世界協会(WA WF)の提唱する「地球市民登録キャンペーン」に率先参加しましょう。詳細は左記へ。

広島市高須町一八二七(〒七三三三)

世界連邦建設同盟広島県協議会

(東京 堀川とぎ)

# 五月の東京月例会、盛況

恒例の日本GAP月例会が五月七日池袋の豊島区民センターにおいて開催された。当日は新緑の映える晴天であり、おまけに飛石連休最後の日曜日であったにもかかわらず、参加者は三十五名に達して盛況をきわめた。

午後一時、蕪沢氏司会のもとに日本GAP久保田代表から御挨拶があり、続いてすぐに代表御自身による「宇宙哲学」の講義となった。その日は「地蔵」の章である。

まず三分間の冥想をした後、当日学習の所を輪読し、いよいよ久保田代表の講義となる。代表はフリーズごとと簡単明瞭に要旨を言われ、重要な部分をピックアップして原書と照合し、詳しく解説を試みられた。毎度のことながら代表は想念観察の重要性を強調される。それは結局アダムスキー哲学を観念的に頭でもってのみ考える傾向の人が多く、彼の哲学を日々の生活において実行する人が少ない為であり、またそうする以外に人間の進歩向上は考えられないからでもある。

次いでその日学習した「宇宙哲学」の箇所における質疑応答となった。「最初人間は完全な状態で生きていた。人間が墮落したのは自由意志のせいである。それならばどうして神は人間に自由意志を与えたのか。良かっただけではないか」など深遠な質問がなされる。

わずかの休憩をはさんで「UFOとGAP」と題するスライドが上映された。これは数日前に東洋英和女学院の文化祭でも上映されたものである。何處見ても実に素晴らしい。

続いて出席者全員による記念撮影があり、自己紹介をまじえた座談会となる。お茶を飲んだりかしわモチを食べたりしながらもさすがに真剣な質問がなされる。特に将来地球に大変動が発生するという予言に関する質問に関心が集まった。

一段落ついたところでいよいよ久保田代表のあみ出された宇宙の意識との一体化実習が代表の解説で行なわれた。久保田代表は以前にも宇宙意識拡大法やダイヤモンド観法なるものをあみ出されており、この「一体化実習」もそれらに勝るとも劣らない、実に素晴らしい価値あるものである。

「まず背を真直ぐに伸ばして静かに目をつむる。そして体内のどこからともなく水が噴水となってわき上がる光景を想像し、目は内部のそれを見るようにする。この清浄な水を宇宙の意識（生命力）にたとえる。噴水の水は全身にくまなくゆきわたる。耳はその宇宙の意識のあふれ出る音に聞き耳を立て、そして次の言葉を中心の中で反覆する。『私は意識と一体である』」

日はそのまま「宇宙の意識」の噴水を見つめ、耳はその音を聞いているようにし、静かに目をあける。そして正面にすわっている相手を次のような気持で見る。「今自分の見つ

めている相手は実は自分であり、一方の自分がもう一方の自分を見ているのである」と簡約すれば以上のようなことである。

これは実に素晴らしい実習法であり、皆の顔には真剣さがみなぎっていた。窓外の雑音などもはや気にならず、自分の内面へ意識を集中し、代表の言葉に聞き耳を立てていた。時間の都合もあって、この「宇宙意識との一体化実習法」はわずかの時間しかできなかったが、それにしても素晴らしいと

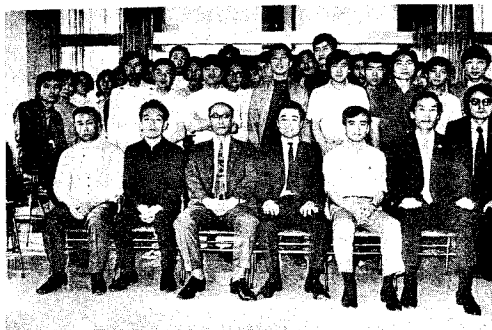
しかしいような実習だった。これは常時道を歩いているときでも電車に乗っているときでも行なえばよいとのことである。

残念ながら定期の時間が来てしまい、先般東洋英和女学院の文化祭で催されたUFO資料展示会の簡潔な報告がリーダーである古徳裕子さんからあり、次いで久保田代表の挨拶によって五月の例会は少々あわただしくも有意義に散会となった。

(中山正史記)



実習風景



記念撮影

# 東洋英和女学院文化祭でUFO資料展示

新緑のもえる季節五月の一日から三日までの期間、東洋英和女学院文化祭において空飛ぶ円盤の催し物がなされた。同女学院は地下鉄日比谷線六本木駅下車、徒歩数分の所。そこは市街地でありながらもかまびすしき騒音もなく、静かなたたずまいをみせていた。

三日、その日は蒸風空を渡るさわやかな初夏の日であった。校内には親子連れがチラホラ見えた他は、ガールハントが目的なのか中、高校生くらいの男の子が想像以上に多く、校内は人で一杯だった。



会場にて、中央が古徳裕子さん。左の後姿は知久真理子さん。

目的の部屋は別館三階の少々奥まった所にあった。ドアは開放されてい、そこには大きな金星型円盤の絵がはりつけられていた。「なぜ彼らは来るのか?」「UFOのナゾをさぐる」という文字が一般の人の興味を誘う。

部屋の中には三方いっばいに紙がはりめぐらされ、中央の机の上には空飛ぶ円盤関係の書物がずらりときれいに並べられてあった。聞くところによると、これはすべてリーダーの古徳裕子さん(高一)の蔵書であるという。机にはその他に聖書の中に記されているUFO関係の箇所を抜き書きして並べてあった。当女学院はキリスト教の学校であるため、これは非常に貴重で価値あることである。

まず矢印に従って目を移してゆくと「UFOとは?」という見出しで空飛ぶ円盤の一般的説明、次いでUFOの種類・形態を詳しく図解、そしてコンタクトケースとして、エディス・ヤコブセン、オスター・ソルヴァング姉妹とジョージ・アダムスキーの体験が列記してあった。一九五二年十一月二十日、デザートセンターにおけるアダムスキーと金星人との会見はあまりにも有名である。

目を反対側に転じると、科学者(C・W・トンボー博士)の目撃例、そして校内目撃例として三例が詳細に図解入りで説明されていたが、このことは現在でも国内に円盤

が出現しているという事実を物語っている。その他にUFOの飛び方を分類して図示してあった。また三冊のスタックブックには宇宙に関連のある科学的な新聞切抜き記事がぎっしりと分類整理されており、全くぼう大な資料である。それらの間を縫うように、いたるところUFOの文字や種々の円盤が色とりどりの折紙ではられていて、女性の繊細さも感じられる部屋の雰囲気である。

新館においては午後一時過ぎ、日本GAPの重沢潤一郎氏夫妻の持参されたスライド「アダムスキーとUFO」が上映された。多くの人々が入り変わり立ち変わりが少く騒々しくもあったが、中には熱心に見ている人もいた。前日には「UFOとGAP」と題するスライドを上映したそうであるが、冷却器付きのスライド映写機がどうしても見つからず、二台の映写機を用いて映写するという苦労もあったようである。

宇宙人実在の可否、UFOに関して、またアダムスキーを知っているかなど実に立派なアンケートを一般の人からとっていたが、三日間でなんと二五〇部を突破したという。

定期の時間が来、素晴らしい業績を残して三日間の文化祭に終了符が打たれた。アンケートの結果を%まで出して詳しくまとめられたノートを後日古徳さんに拝見させていただいたが、UFOについて何か

聞いたことがあるかという質問に対し、新聞によると書いた人が二五〇名中四九人もあった。本で知っているという人がやはり一番多くて一〇一名、次いでテレビの九三名であった。UFOの飛行目的としては観測の為というのが圧倒的に多く(一〇八名)地球侵略というのが一六名と以外に少なかった。またアダムスキーを知っていると答えた人は十人に三人の割合である。宇宙人や円盤に関してはやはり少年雑誌やテレビの影響が大きく、宇宙人を信じるという人も広大な宇宙のどこかには高度に発達した宇宙人の存在も考えられるという程度の考えの人が多かったようである。

その日一日を回想してみると、実に充実した素晴らしい内容であった。まったく驚嘆のほかほかはない。しかもこれは同校UFO研究クラブの古徳さんをリーダーとする六名の有能な女性(高一)ばかりによって遂行されたのである! 高校一年生の女生徒だけによるUFO研究クラブとしてこのグループは国際的なレベルに達しているものと思われる。特に古徳さんや知久さんなどは中学生の頃からUFO研究に熱心であり、日本GAPの月例研究会にもしばしば姿を見せて質問や意見発表などを行っていた。年若くしてしかもかわき女性この身でこのような高度な研究を続けているとは日本の円盤研究界にとっても心強いかがりである。同クラブが更に発展して学園におけるUFO問題の啓蒙活動に輝かしい足跡を残されるよう今後のご活躍を期待する次第である。取材にあたりお世話になった同クラブの方々に厚くお礼を申し上げます。(中山正史記)

# 大阪支部例会報告

間もなく満三才の誕生日を迎えようとしている日本GAP大阪支部では、去る六月十八日、久保田代表を東京から招いての月例研究会が開かれた。出席者は十数名で総会に比べると少なかったが、そのためかえってつこんだ話が展開され、非常に有意義であった。

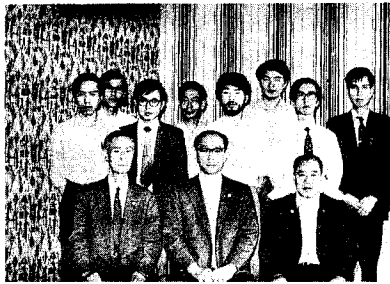
挨拶及び講話の中で代表はアダムスキー哲学の重要性とこれを学ぶ態度という面について次のことを話された。(1)数千年続けられてきたスペース・プログラム(地球救済計画)という大変な出来事に我々は関係しているのだから、新時代への先駆者の常として大衆に理解されず難儀な目に会う事もあるが、それはそれで価値のある事だ。(2)想念観察などの実行もせずにとやたらと議論したり会員を増やそうとしてもダメで、何はさておき各人が熱心に内部のフィードバックを高める練習・工夫をすることである。(3)想念観察は自分の「想念ボタン」を客観的に知る上で必要だが、よりすぐれた「想念ボタン」に切りかえるためには、「意識との一体化の実習」といった積極的な方法を採用するのが望ましい。——あとでこの具体例として、代表が独自に開発された「一体化実習」を彼の指導のもとに三十分位行なった。

質疑応答と会食・座談の時間には「生まれ変わり」、「オーラ」についての質問が殺到し、一時は代表が無事に食事を終えられ

るかと危ぶまれた程でした。(1)人は十五、六回生まれ変わわり、その間に宇宙の意識に気づかなければその本体は消滅し、気づけば永遠に生まれ変わる。

(2)男と女に半々に生まれ、男の時は意志力を、女の時には忍耐力を養う。(3)靈魂はふつう出産直前の胎内に入る(所要時間は平均三秒)が、ア氏の場合は生後二年目位に入れたらいい。(4)オーラの見える人の能力はベーター・フルコスに匹敵するからそれ以上であり、この人がGAPの中にいるということは偶然ではなく、何か重要な意味がある。・・・といったことが明らかにされた。「例会」は一人て本を読むだけではなかなか得難い「確信」すなわち「実践への勇氣」を得るのに絶好の場だというのがこの例会から受けた印象である。

(浅井絵一記)



記念撮影

## 日本GAP大阪支部大会を開催

### プログラム

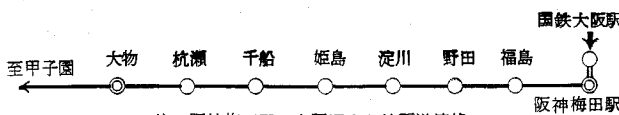
- |                    |               |
|--------------------|---------------|
| 1. 市川大阪支部代表挨拶      | 10:00 - 10:10 |
| 2. 久保田日本GAP代表挨拶・講演 | 10:10 - 11:40 |
| 一昼食・休憩—            | 11:40 - 12:30 |
| 3. スライド映写          | 12:30 - 1:30  |
| 4. 宇宙の意識との一体化実習    | 1:30 - 2:20   |
| 5. 自己紹介と質疑応答       | 2:20 - 4:20   |
| 6. 記念撮影            | 4:20 - 4:50   |
| 7. 市川大阪支部代表挨拶      | 4:50 - 5:00   |

会費 四百円

\*昼食代及び記念写真代(二百円)は別に用意下さい。

恒例の日本GAP大阪支部大会を本年も次の要領で開催することになりました。酷暑の折で申し訳ありませんがふるってご参加下さるようお願い申し上げます。

とき 八月二十日(第三日曜日)午前十時より午後五時まで  
ところ 尼崎産業郷土会館  
\*阪神電車「大物(だいもつ)」駅下車北側徒歩三分。  
会場 冷房完備。食堂・休憩用ロビーあり。



注：阪神梅田駅は大阪駅より地下道連絡。

# 日本GAP月例研究会

## 大阪支部例会

1. 日時 毎月第一日曜日と第三日曜日の二回開催。午後一時より四時まで。
  2. 会場 \*兵庫県尼崎市 尼崎産業郷土会館  
(阪神電車「大物」だいもつV駅にて下車。北側へ徒歩三分)
  3. 会費 いずれも百円。
  4. 携行品 テキストとして第一日曜は「生命の科学」、第三日曜は「宇宙哲学」を持参のこと。
- 注意：四月より第一日曜の例会を京都にて再開と予告しましたが、都合により第一日曜も尼崎会場で行ないます。

## 東京例会

1. 日時 毎月第一日曜日、午後一時より四時半まで。  
(時間厳重。途中入場も可)
  2. 会場 豊島区民センター四階会議室。(国電池袋駅の東口下車。三越デパートの左横の道を奥へ奥へと行けばよい)
  3. 会費 百五十円。茶菓が出る。
  4. 携行品 テキストとして「宇宙哲学」を持参のこと。講師は久保田代表。
- ◎代表挨拶、経過報告、「宇宙哲学」研究、質疑応答、自己紹介、座談会、スライド映写の順。

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二箇所で開催して会員の向上を図っています。特にUFO関心のスライド映写も実施していますが貴重な資料をスライド公開しているのは我国では日本GAPだけであり、希少価値が高いと自負します。都府内外近郊の方はぜひご参加下さい。

アダムスキー哲学三大名著！

絶賛発売中

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思维法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

## 宇宙哲学

¥350 円45

振替東京94804

東京都新宿区納戸町33 たま出版

## 生命の科学

¥420 円55

## テレパシー

¥290 円45

振替東京2521

東京都文京区白山1-29-12 文久書林

## 本誌旧号

本誌バックナンバー(旧号)は次のものが在庫。部数僅少につき未入手の方は早目にご注文のほどを。送料は不要。低額切手代用にてOK。47号まで各200円・48号以降は各250円

46号・47号・48号・49号

## 想念観察手帳

想念感情の観察はアダムスキー哲学実践のキポイントであり、この実践より真の理解が生じる！  
日本GAP特製の手帳を使用すれば記入が容易で飛躍的な向上が期待できる。会員必携の手帳！

¥150 送料は1冊25円・2冊55円・3冊70円・4冊85円・5冊115円

以上は日本GAPへ直接注文されたい。

# 編集後記

◎いつも多大なお世話様に相成り厚く御礼を申し上げます。おかげ様をもちましてここに創刊第五十号を発刊の運びに至りました。そこで本号は記念特大号として増頁し四十四頁としました。かなり充実したものと自負します。ただし次号からは再び三十頁代から二回にわたりました。ご了承下さい。

◎本号から二回にわたって「ホワイトサンズ事件」を連載します。別な太陽系から来たといわれるUFO乗船奇談には興味深いものがあります。

◎懸案であったライフ誌の「指で色を見る」をやっと全訳で発表できたのは喜ばしいことです。ソ連の不思議な超能力者に関するこのすばらしい事実物語はきつと皆様を魅了することと思います。練習用図形も添付してありますから皆様も超能力開発をお試し下さい。興味ある結果が出た方はご一報下さるようお願いいたします。

◎会員の体験記としては市川大阪支部代表の令息英一さんと三田堯一氏の貴重な手記を掲載することができました。よい刺激になる有益な記事です。

◎編者による「スペース・プログラム」は大体に各例会で話したことを骨子としてそれに手を加えたものです。多少ともご参考になれば幸いです。

◎「アダムスキーの「空飛ぶ円盤同乗記」は編者が心血をそいで改訳したもので、完べきな訳になっているつもりですが、原書と対照してお読みになった人で気づき点がございましたらお知らせ下さい。

◎別掲記事のとおり日本GAPは東京、大阪、群馬県大田市等において月例研究会を活発に行ない、会員の研さんをつんでおり

ます。意見研究発表等はもちろん、感覚器官の抑制法実習も行ない、お互いのレベルアップを図っており、一種の講習会といえる大勢の人々と一堂に会してリファインされた雰囲気ひたることは有益ですから、近辺の方にはなるべくご参加下さい。

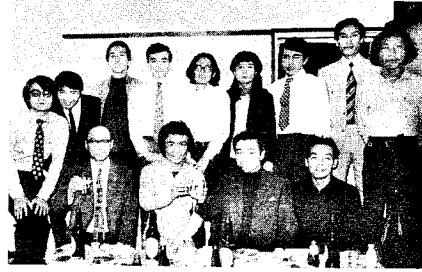
◎群馬県大田市のGAP同好会はこの七月二十二日の午後六時から太田市市民会館で例会を開催する旨の報告がありました。本号の締切り間に合わず、予告の掲載が不可能となりました。今後の同地における例会については左記宛に直接ご照会下さい。

群馬県大田市浜町四八七、久保寺信一

◎GAP会員の石川哲之助氏(東京)は去る六月二十四日に赤坂の宴会館においてめでたく結婚式をあげられ、編者はGAPを代表して披露宴に出席し祝辞を述べさせていただきました。新郎は通産省の中堅職員で火薬の専門家、天体観測にもくわしく、新婦は札幌出身の才媛。ご夫妻のご多幸をお祈りする次第です。

◎ニューヨークの名門美術スタジオ「ブッシュニビン」へ唯一の日本人美術家として入所している日本GAPメンバー宮内温夫氏が去る五月上旬に二年ぶりに帰国されました。五月中旬に渋谷の東急デパートで「ブッシュニビン展」が開催されたのを機会に有名なミルトン・グレイサー氏らと共に二週間の暇帰国となったもので、本会はこの機に宮内氏の帰国歓迎会を五月十四日に池袋の料理店で開催しました。出席者は十六名。久方ぶりの再会に和気あいあいたる雰囲気のみならず、一同は氏の土産に耳を傾け、持参のスライドを觀賞、実に楽しい一夜をすごしました。輝かしい業績を少しも誇ることなく失敗ばかりやっっては皆を笑わせる謙虚な態度に心を打たれた次第です。同氏は五月二十三日に羽田からスタジオのメンバー一行と共に「日本GAPの

皆さんによろしく」との声を残して帰米の途につかれ、これを編者と会員の菅野氏の二人で見送りました。宮内氏のご健闘を祈る次第です。なお同氏は滞米中にイギリスの第三回国際版画展にも入選して万丈の氣をはいしたこと、アダムスキーの「生命の科学」をパイブルとしておられることをつけ加えておきます。



すわっている四人の左から二人目が宮内氏

◎別掲予告のとおり今夏も八月に大阪支部大会を開催することになりました。同支部は市川代表を始めとして真剣に研究される方が多く、雰囲気も盛り上がると思えます。関西一円の方はぜひご参加下さい。スライドは円盤ものに加えて想念観察に関するものも準備する予定です。

◎今秋は日本GAP総会を東京で開催の予定です。この詳細な予告は次号に掲載いたします。

◎本誌に連載して好評を博したフレッド・ステックリングの「なぜ彼らは来るのか」は「なぜ空飛ぶ円盤は来るのか」と改題の

上、今秋ある出版社から出版の予定です。この詳細も次号に載せます。

◎本号は増頁のために送料が七十円となりましたが、次号からは再び五十五円になる予定です。から、次号分より会費お払込の際は従来どおり一回分三〇五円(誌代二五〇円+送料五五円)の計算でOKです。会費切れの方だけに本誌の中へ「会費切れ」と赤字で記した小紙片のついた振替用紙を同封します。

◎本誌誌代一部二五〇円というのが高価なように思われるかもしれませんが、なにぶんにも発行部数が少ないうえに一部あたり割高になるわけで、それも編者みずからタイプを打ってオフセットの版下を製作するからこの程度ですむのであって、もしこれをすべて印刷所へ依頼すれば一部あたり四〇〇円以上になるはず。その辺の事情をご了承下さい。

◎ご寄付の御礼。(四月十一日以降七月十日まで)安田正人氏(鹿児島市)二千元、佐藤テル氏(福島市)一千元、藤原孝幸氏(岩国市)三万一千円、黒岩秀雄氏(伊東市)一千元、匿名氏(東京)四千元、西田貞昭氏(神戸市)一千元、羽島雅巳氏(東京)三千元、三田堯一氏(栃木県)一万元、匿名氏(神戸市)二万円、安部雅子氏(山口市)三千元、三浦修氏(東京)六千元、増野一郎氏(鳥根県)二千元、笹木文彦氏(相模原市)八百八十五円、斎藤俊一氏(茨木市)三千元、堀川とさ氏(東京)三万円と陣中見舞物数箱。(久)

1972.7  
GAPニューズレター 第50号  
編集発行人 久保田八郎  
発行所 日本GAP  
東京都江戸川区篠崎六二二-三  
振替東京三九二-久保田名義  
頒価二五〇円・送料七〇円